

藤原秀衡・泰衡期における都市平泉の交通体系と都市機能

～「大平泉」復原試案～

[研究科]教育学研究科

[専攻]教科教育専攻

[専修]社会科教育専修

[学籍番号]12GP204

[氏名]上野 翔平

目次

はじめに	2
序章 中世都市としての「都市平泉」	4
第一節 これまでの研究史と問題の所在	4
第二節 「中世都市」としての都市平泉	5
第一章 都市中心部の景観と都市機能	14
第一節 政庁・屋敷・道路・諸施設の配置	14
第二節 宗教施設の配置	20
(1) 中尊寺	20
(2) 毛越寺と観自在王院・無量光院	24
(3) 鎮守社	26
第二章 陸上交通・海上及び河川交通の広がり	と都市機能 32
第一節 陸上交通	32
第二節 海上及び河川交通	34
第三節 衣河	37
第四節 祇園	45
第五節 白鳥館遺跡	47
第六節 本町遺跡	48
終章 都市平泉の全体の特徴	52
第一節 宿遺跡と月館遺跡	52
第二節 都市平泉全体の特徴	54
おわりに	58
史料編	59
図版編	61

はじめに

「都市平泉」に出会ったのは、大学4年生の時である。岩手県出身だが、諸事情で和歌山大学教育学部に通っていた筆者は、この大学で学んだ日本史研究のノウハウを活かして地元の歴史を調べ直すため、大学院に進みたいと思っていた。

筆者の卒業論文は、「中世阿弭河荘における城館の所在と築城目的」である。「ミミヲキリ、ハナヲソキ・・・」という片仮名書百姓申状の舞台となった紀伊国阿弭河荘には、中世の山城も多く存在する。どこに、どのような山城があり、何のために築城されたのかを明らかにすることが狙いであった。

それを調べるために用いたのが、「明治八年第十月字限圖面 紀伊国有田郡清水村」という地籍図である。現在の地形図に地籍図の地割を当てはめ、文献史料と縄張図を加えて総合的に考察した。論文の出来は散々であったが、当時の筆者には、地籍図の復原ぐらいしかノウハウがなかった。

これを活かせる地元の題材はないだろうか。そう思いながら、本を探していると、『平泉・衣川と京・福原』（2007 入間田宣夫 高志書院）中の、斉藤利男「都市衣川・平泉と北方世界」にて、明治初年の胆沢郡下衣川村地籍図を用いた都市衣川の復原図に出会った。世界遺産に登録された平泉の、さらに北にある衣河。そこにも奥州藤原氏関係の諸施設が存在し、都市として不可欠な機能を果たしていたという。

この論文に胸が高鳴った。平泉といえば、奥州藤原氏がいることや中尊寺金色堂や毛越寺などの浄土庭園があることしか分からなかった。だが、平泉に「都市」が存在し、平泉以外にも景観が広がっていたのか。地籍図も駆使して、平安時代後期の景観を復原することが出来るのか。あの時の衝撃と興奮は忘れられない。斉藤氏のいる弘前大学大学院に進学し、自分も今までのノウハウを活かして、衣河に広がる奥州藤原氏代の景観や都市機能を調べてみたいと心から思った。

だが、入学して早々、斉藤氏から衝撃的な言葉を聞かされた。衣河は粗方調べ尽くされているというのだ。さすがに困惑したが、すぐ白鳥館遺跡などを調べてみるのはどうかと助言を頂いた。白鳥館遺跡は、衣河の更に北にある遺跡で、ここからも奥州藤原氏代の遺物が発見されているという。それだけでなく、これまでの研究や発掘調査報告によると、平泉の南の「祇園」・東の「本町」からも平泉と共通した遺物が出ており、奥州藤原氏代にも何かしらの機能を果たしていたという。斉藤氏は、これらの地域が相互に機能し合ったことから、「大平泉」ともいえる都市空間が広がっていたのではないかとまで述べていた。

いよいよ興奮は頂点に達した。平泉は、こんなに大規模なのか。各地域には、どんな景観が広がっていて、どのような役割を果たしたのだろうか。この2年間で出来るところまで調べ、奥州藤原氏代の都市平泉に広がる景観を、目に見える形で蘇らせたい、1日たりとも無駄には出来ないと目標と決意を固めた。

しかし、景観の復原だけでは、本当の意味で「復原」とは言えない。いつの時代にも、その場所に生きていた人々はいる。「都市」ということは、権力者による政治や寺院による宗教活動、市場での商業活動など、農村とは異なる人々による生活の営みもあったはずだ。都市平泉には、どこに、どのような人々がいて、どのような生活をしていたのか。そこまですら推測すれば、多くの人々が、頭の中で映像にするほど具体的に想像でき、興味や関心が湧くかもしれない。

以上より、都市平泉に広がる景観と各地域の都市機能、そこに生きていた人々の考察を行なうことが、この修士論文の目的である。不十分な点が多々あるが、この論文が、少しでも都市平泉に関心を持っていただく契機になれば幸いである。

序章 「中世都市」としての都市平泉

はじめに、本研究の方法は、文献史料の解釈が主である。そこから、発掘調査といった様々なデータと照合し、より矛盾することなく総合的に復原を試みる。

平泉が世界遺産に登録されて2年余。中尊寺金色堂や柳之御所遺跡などの名所が残され、多くの観光客に親しまれている。では、奥州藤原氏が生きていた時代の平泉には、どのような景観が広がっていたのだろうか。

第一節 これまでの都市平泉論と問題の所在

都市平泉は、実に多様な機能を持った「複合都市」であった。まず、政庁「平泉館」と、奥州藤原氏一族や平泉政権スタッフの屋敷の建ち並ぶ政治機能があった。また、京都や鎌倉にはない、普く人々に平等に救いが施される「法華経」の思想が東北全土に浸透するよう、その中心に中尊寺などが建立され、周囲には経塚も営んで地域を守護する宗教昨日もあった。だが、南宋や蝦夷とも陸路や水路でつながり、そこから品々を獲得し、中央政府に年貢として貢納する場合もあった。ゆえに、これらが安全に運搬される交通路が整い、商売も行われる交通・商業機能もあった。政治・宗教・交通・商業機能の相関し合う都市であった。

このような性格を持つ都市平泉は、どこまで広がっていたのだろうか。

これに関しては、これまで多くの復原案が出された。その経緯を振り返ってみよう。

かつては、室町時代後期に描かれ、永正年間(1504~1521)に複写されたという「平泉古図」に描かれた景観が、そのまま信頼されていた(図A)。それに対して斉藤利男氏は、絵図に「本丸」と記されていたり、石垣や矢狭間・鉄砲狭間を伴う土塀の描写が見られるなど、平安時代には登場しない、むしろ近世に見られる技法で描かれていること、更に「侍町」とされる場所は、洪水が来た際に浸水してしまう場所に描かれていることを理由に、「平泉古図」の史料批判を行った[註1]。そのため、この絵図の信憑性はなくなった。

その後、文献史料や柳之御所遺跡などの発掘調査が進む中で、斉藤利男氏は、現在でも残っている地名を基にして、北は衣河・南は祇園という範囲まで含んだ復原図を作成した(図B)。この復原図では、丹念な現地調査も行なった上で、北上川旧河道の復原案も提示された。そして、都市平泉は、俘囚の地と陸奥国の境界に位置し、「奥六郡の主」の本拠地であった衣河を一大商業地として継承した「境界都市」であると捉えた[註2]。

ところが、地名を当てはめただけで、発掘調査による証明がなされていないという批判

が多く起こった。さらに、入間田宣夫氏は、平泉館・無量光院・加羅御所の三点セットに集中する復原案を提示した(図 C)。その案では、北上川旧河道が、十分な検討もないまま、現在の河道と変わっていないのではないかと判断された。そして、都市平泉は、一族が肩を寄せ合うように集住して有事に備える、北奥羽の軍事首長の伝統を色濃く引きずった「宿営都市」であると述べた。平泉の柳之御所遺跡すなわち平泉館は「軍事的緊張感にあふれた光景」であり、これが秀衡期まで一貫して続いたとも述べている[註 3]。その後、斉藤利男氏の旧河道説は認められたが、都市平泉の復原案は依然として狭いままであった。

これ以後、衣河や祇園などの発掘調査が行なわれ、奥州藤原氏が生きた 12 世紀代の遺跡や遺物が数多く発見されるようになった。更に、文献史料の解釈も緻密なものとなり、入念な現地調査も進展したため、斉藤氏の復原も含めて、より広範囲に捉えられるようになった。今では、北は衣川・南は祇園まで広がることを否定する人はいない。

しかし、都市平泉は、もっと広範囲であったと思う(図 D)。例えば、北の白鳥館遺跡、東の本町遺跡・里遺跡・月館遺跡、南の宿遺跡である。これらからも、手づくねかわらけなど、平泉と共通した遺物が発見されている。これらの地域は、さまざまな機能をもった都市への入り口であった。そして、奥大道という中世の東北縦貫道や北上川旧河道などの交通網で繋がり、平泉や衣河の都市中心部と密接不可分な関係を持ったことにより、「大平泉」ともいうべき都市空間が存在し、都市として機能しえたと考える。

今回は、遺構や遺物が多く出土している 12 世紀後半、すなわち藤原秀衡と泰衡が生きた時期における都市平泉の交通体系と都市機能を示しながら、上に述べた根拠を説明する。これを通して、奥州藤原氏の都市形成における独自性を見出し、都市平泉解明の足掛りとしたい。

第二節 「中世都市」としての都市平泉

都市平泉は、「古代都市」ではないかと捉える人々がいる。

それは、権力者によって整備された都市であるという理由から来る発想であろう。

古代都市とは、笹本正治氏も端的に述べているように、平城京や平安京など、朝廷という支配者側の意図によって計画された宮都である。それゆえ日本の中でも極めて特殊な、国家の中央でしか見られない都市であった[註 4]。商人や職人に対する国家の関与も大きく、四角四境祭が催され、天皇中心の神仏に守られた地域が一つの世界と捉えられていた。その畏怖は民衆にまで浸透していた。

特に平安京の場合、地形はお構いなしに、右京と左京の造営・街路の整備・住居の提供が行なわれた。その結果、もともと低湿地であった右京は、人が住まなくなると衰退し、逆に扇状地の影響で一番土地の質が良い、左京の上部に人々が密集する事態が発生した[註

5]. 権力者主体の造営が招いた末路といえよう。

確かに、都市平泉も、藤原清衡・基衡・秀衡の三代に渡って、政庁である「平泉館」や中尊寺や毛越寺などの宗教施設、道路が整備された。その点のみを見ると権力者による造営となり、「古代都市」と捉えられても無理はない。

しかし、これまでの発掘調査を見ると、大量の手づくねかわらけなどの京都発祥の製品、常滑・渥美といった当時最先端の国産陶器、白磁四耳壺をはじめとする中国産陶磁器があらゆる場所で発見されている。なかでも、手づくねかわらけ・常滑三筋文壺・渥美刻画壺・白磁四耳壺は「平泉セット」と呼ばれ、政治そのものである宴会儀礼に用いられる[註 6]。都市平泉内での「平泉セット」の分布を(図 E)に示しておく。

これらは、奥州藤原氏が都市平泉内を整備しただけでは、手に入れられない品物ばかりである。これらを生産地から入手し続け、都市平泉内でも生産し続けるためには、生産に携わる専門の職人の存在、生産地から平泉まで安全に運送する交通体系や運送組織の整備が不可欠である。

この二点は、「中世都市」に不可欠な条件であり、これらが揃っているからこそ、筆者は、都市平泉が「中世都市」だと考える。その根拠を、研究者の主張を取り上げつつ具体的に論じていこう。

都市に限ったことではないが、必ず、そこに生活している人々・そこにやって来る人々はいる。岡陽一郎氏は、都市平泉に生きた人々として、奥州藤原氏に仕える人々・宗教関係者・彼らに諸々のサービスを行なう人々(商人や職人など)を挙げている[註 7]。

奥州藤原氏当主とその一族や家臣・中尊寺や毛越寺に関わる僧侶は、間違いなく生活していた。商人や職人も生活または往来していただろうが、どのような商人・職人かを考えることは出来ないだろうか。

網野善彦氏は、中世都市の特徴として、職人の自立した活動を挙げている。

中世前期(12世紀から13世紀以降)は、自給自足的な農村がほとんどで、農業・工業・商業の未分化な社会であった。しかし、農業以外の生業で専ら生活する、漁民・狩猟民・手工業者・商人・芸能民・呪術師のような非農業民も存在した。手工業者は、白粉焼・銅細工・紺屋など多数だ。彼らは、各々の職種ごとに「道」を持って極めており、それによって身につけた技術や技能は「芸能」と捉えられていた。そして、職人となって、その「芸能」を営むことでのみ生活した[註 8]。

都市平泉には、どのような職人がいたのだろうか。さまざまなデータから考えられるだけ考えてみよう。

白鳥館遺跡において、かわらけ窯跡が多く発見されている。12世紀後半になると、平泉でも手づくねかわらけが頻繁に使われ、衣河の接待館遺跡のように大量に廃棄される。井

上雅孝氏は、手づくねかわらけが、京都の土師器工人の技術指導の下、在地のロクロかわらけ職人によって製作されたと述べている[註 9]。以上から、かわらけ製作職人が、在地の人も、京都の人も含めて存在したことが分かる。更に、鍛冶遺構も発見されているため、「鍛冶」職人や、刃物を研ぐ「砥」と呼ばれる人々もいた可能性が考えられる。

岩手県平泉町の白山社付近では、12世紀後半の、寺の鐘を生産する梵鐘製作遺構も発見されている。五十川伸矢氏によると、梵鐘生産遺構は、鐘を奉納するために寺院の近くに営まれ、梵鐘生産の先進地帯である畿内の工人が、藤原氏の当主クラスによって招聘されて製造に携わったと述べている[註 10]。大変な労力のかかる作業と想像されるため、鉄製品の製作に携わる「鋳物師」が、畿内の人々も在地の人々も含めて存在したのかもしれない。

平泉の志羅山遺跡では、馬に取り付ける「轡」も出土している。久保智康氏によると、ここから出土した「鉄鴛鴦文銅像嵌鏡轡」と、京都市東山区法住寺殿跡から出土した「鉄鶴文銅像嵌金銀鍍鏡轡」が12世紀後半の製作で技法も似ているため、平泉の金工工房には、在地の工人と平安京工房から来た工人の両者が存在したと推測している[註 11]。この工人の存在も考えられる。

政庁「平泉館」とされる柳之御所遺跡では、奥州藤原氏三代に渡って「四面庇建物」が建設された。同様に、志羅山遺跡や泉屋遺跡及び衣河・祇園においても発見されている。このような格式の高い建物を建てるためには、専門の職人は不可欠である。ゆえに、「番匠」と呼ばれる建築業者も滞在したと思われる。

この遺跡からは、料理に用いる曲げ物も発見されているため、これを製造する「檜物師」の存在も考えられる。

当然ではあるが、女性も多く生活している。『玉葉』文治4(1188)年正月9日条にて、藤原秀衡と「当腹」すなわち正妻との間に次男泰衡が生まれ、「他腹」すなわち側室との間に嫡男国衡が生まれたことから想像がつく[史料 1]。となると、その女性の身のまわりを世話する、従者の女性も存在したはずだ。女性が髪をとくためには「櫛」が不可欠である。柳之御所遺跡でも櫛が出土しているので、櫛を製作する「櫛挽」もいたであろう。

また、『吾妻鏡』文治3(1187)年10月29日条にて、秀衡が「日来の重病」によって「卒去」したとある[史料 2]。病を治すために、「医師」を呼び寄せたことは想像がつく。

現時点では、ここまでしか推測することが出来なかった。しかし、まだ考えられる余地はあるため、今後も調査を続けたい。

網野氏によると、このような職人は、各々のもつ「芸能」を通して、天皇・摂関家・将軍家・大寺院・神社といった権門に、何らかの形での奉仕が課せられたという。これが、職人にとっての年貢であり公事であった。奉仕する権門によって称号が異なり、天皇家の場合は「供御人」、摂関家では「殿下細工」、寺院では「寄人」、神社では「神人」あるいは「供祭人」と言われた[註 12]。そして、ある一つの権門のみに奉仕せず、自らの意思で様々

な権門を兼ね仕えることができた。

都市平泉にも、「神人」が往来していた。

寺塔已下注文「一 関山中尊寺事」によると、中尊寺の北方鎮守に「白山社」、南方鎮守に「日吉社」が勧請されている[史料 3]。中尊寺は、山門系延暦寺の奥州進出を契機に成立したため、延暦寺との関係も深かった。この経緯は第一章第二節で詳述するとして、延暦寺に属した日吉社と白山社、すなわち日吉神人と白山神人も往来した。日吉神人とは、近江日吉社に属し、山門（延暦寺）の保護下で諸国を往反する特権を得て交易を行なった神人である。白山神人も、石川県石川郡鶴来町三宮町に鎮座し、比叡山の末院となった白山比咩神社に属する神人だ。彼らは、それぞれの本社のある近江と加賀から、京都と平泉を接続するように往来したと考えられる。

今まで述べてきた職人や神人らは、すべて「無縁」の人々であった。

売買交易を行なうためには、その拠点となる市場や宿泊施設において、殺人や強盗のような、商売の安全や平和を脅かす事態が発生してはならない。殺人・強盗・戦は、人々の「縁」によって起こると考えられたため、安全と平和と図るには、これらの「縁」のない「無縁」の世界は必要であった。

網野氏は、都市のできる場は「中州」「河原」「浜」であると述べ、そこが遍歴している非農業民集団の集住地となり、「無縁」の場になったと述べている[註 13]。

都市平泉には、祇園の「三日町」、衣河の「六日市場」や「七日市場」、「下宿」といった市場や宿に関する地名が残されており、鎌倉期の記録にも、おそらく現在の下衣川村にあったと思われる瀬原村に「瀬原河原宿」が存在したとある。その付近には、「旅人往還の道」である奥大道や、衣川や北上川などの河川が通っており、自由往来のための設備が整えられた。

これらの市や宿地名が、河原や陸上道路付近に存在することから、網野氏のいう「無縁」の場が、都市平泉にも多数あったことが窺える。

更に、職人達は、諸国を自由に往来する権限も持っていた。市・津・関・渡・泊などで交通税を賦課されず、売買交易も自由に行なえる特権である。中世前期の職人は、非常に広い範囲を遍歴し、自らの「芸能」や、「芸能」による生産物を売買交易して、その利潤を自分のものにした[註 14]。生きること自体が困難な中世において、自らの「芸能」のみで生きていくためには不可欠なことであった。

都市平泉においても、奥大道などの陸上道路や、太平洋・日本海に広がる海上ルート、海上から都市平泉へ続く河川ルートが整備されている。そのルートを自由に往来することで、自らが生きていくために「自立」して活動したのである。具体的なルートについては、第二章で後述する。

さて、中世は「自力救済」の時代ともいわれる。

自力救済とは、権利を侵害された際、法の定める手続きによらないで、自己の実力でもって権利を回復・実現させることをいう。それが当時の紛争解決手段であった。高橋昌明氏は、貴族から寺院大衆、下は民衆まで、程度の差こそあれ武装しているのが普通であったと述べている[註 15]。

となると、商品を持って諸国を往来する際、盗賊によって荷物が奪われたり、運搬する人々が殺害される事態も起こりかねない。人や物が安全に且つ円滑に運ばれるためには、道の安全が保証されていることや、運搬を滞りなく行なう組織が機能していることも不可欠である。

戸田芳美氏は、運搬する担い手の変化に中世都市の特徴を見出している。

では、かつての担い手はどのような人々で、どのような人々へと変わったのだろうか。

戸田芳美氏によると、荘園制下での都鄙間交通は、本所がそれぞれに使者を下して貢納物を調達・収納し、京都に運搬する仕組みで機能したという。更に、諸国から京都へ荷物を運搬するため、諸国にいる国衙は、国内の主要港湾や幹線道路の宿駅を、村落の有力者である刀禰や長者を通して支配し、国内に交通所役を課して、中央への貢進ルートと輸送手段の確保に努めた。運輸手段である「運船」と「駄馬」は、民間の船主・馬主のものを借り上げて使用したという[註 16]。

その状況下で運搬の担い手となったのが、毎年臨時に任命される「運上物押領使」とよばれる武士であった[註 17]。ただ、それに任命されても、道中で盗賊に襲われて荷物を奪われる事態は発生した。

その後、農業とは異なる工業や商業などの社会的分業が発展すると、遠隔地商業に従事する商人高利貸が、諸国によって整備された貢納物ルートを逆に辿り、地方に向けて営業活動を行なった。その担い手は、網野氏も述べている供御人・寄人・神人などの特権的奉仕者身分を帯びた中央業者集団であった[註 18]。

例えば、日吉社大津神人は、都・山門末社・諸荘園をつなぐルートの営業圏を足場に、在国の神人と手を組み、都鄙間を往来しつつ営業を拡大・展開した。構成員には、13世紀初め大宰府近辺の山門末寺大山寺の神人にいた「通訳船頭」の「張光安」のような外国人もいた。そのため、宋磁を含めた「唐物」も、都の権門社寺や市町に搬入された。

以上のように、戸田芳美氏は、交通体系の担い手が、かつての「運上物押領使」から商人高利貸業者へと変わったことが、中世都市の特徴であると述べている。この変化によって、より広範囲にわたる物資や人の往来が可能になった。

都市平泉には、北方や南、更には東から、それぞれの地域でしか生産されない交易品がもたらされている。

北方からは、寺塔已下注文「一 毛越寺事」にて、基衡が仏師雲慶に仏像製作を依頼した際に贈った、「鷲羽百尻」・「水豹皮六十餘枚」・「糠部駿馬五十疋」が挙げられる（図 F）
史料 3。

「鷲羽」は、白色に褐色の斑文のあるオオワシ・オオジロワシの尾羽のことで、朝廷の儀式に用いられる弓矢の矢羽として重用された。その産地は、飛来地である知床半島を中心とした北海道道東や、生息地であるサハリンからの交易による。

「水豹皮」とは、豹に似た斑文を持つゴマフアザラシを指し、馬の下鞍として重用された。道東あるいは道北のオホーツク海沿岸の流氷地帯に生息する。

北海道からは更に、10 世紀以降から北海道の石狩川や天塩川流域で生産され、保存食となった「干鮭」や、「昆布」ももたらされている。

これらを運搬したのは、北海道の蝦夷集団であった。実際、北海道の厚真にて、平泉と共通した大型の渥美産陶磁器が発見され、北海道にも平泉勢力が及んでいたことが分かってきた[註 19]。しかし、奥州藤原氏の蝦夷集団へのかかわりは、交易品を貰うかわりに、生活の必需品である鉄を輸出する緩やかなものであった。これによって、北方の蝦夷集団とは長年に渡って良好な関係を保った。第二章でも後述するが、それらの物品は、津軽海峡を越える海上交通によって渡ってきたであろう。

「糠部駿馬」については、糠部郡とは青森県東北部と岩手県北部に位置し、駿馬の一大産地であった。馬の飼育に慣れている人の手で駿馬を引き、兵に警護されながら運ばれたのかもしれない。船で運ぶと、馬が暴れた際に転覆して危険なため、陸路で運ばれた。

南からは、尾張の「常滑産陶器」・三河の「渥美産陶器」・能登の「珠洲窯製品」といった国産陶器や、「手づくねかわらけ」や「轡」といった京都発祥の製作技術などが挙げられる。それだけでなく、「白磁器」・「青磁器」・「青白磁器」・秀衡時代、金字一切経の写経に使われた「宋版一切経」（図 G）などの南宋の品々や、文治 5（1189）年 8 月 22 日条にある「犀角」・「象牙笛」・「水牛角」・「蜀江錦直垂」、更には中尊寺金色堂に用いられている「紫檀」・「赤木」など、アフリカ及び東南アジア産で、海のシルクロードを介した品物も考えられる[註 20] 史料 4。

常滑・渥美などの国産陶器は、秀衡の舅となる鳥羽院近臣の陸奥守藤原基成や葉室流藤原氏一族と奥州藤原氏が密接に繋がったことにより、12 世紀半ばから海上輸送で運搬されたと考えられている[註 21]。その担い手は、伊勢海と中心に紀伊・遠江・房総など太平洋一帯で活躍する熊野の海民であった。大型の渥美産陶器が発見されているため、海上輸送されたのは当然であろう。

中国産製品について、宋代における日本への貿易港は「寧波」であった。寧波から出発した舟は博多へ着き、そこから各地に運搬される。奥州藤原氏は、中国とのつながりを深めるために、12 世紀の大宰府に存在した天台寺系の末寺、大山寺と通じていた。これによ

って博多宋人商人と密接な関係を築き、日吉・白山神人に運搬させるなどして、中国産物を直接入手するルートも獲得した。だからこそ、秀衡期に明州吉祥院から宋版一切経を入手することが出来た[註 22]。都市平泉での中国産白磁器の大量の発見や、宋版一切経が約6000冊も輸送されたことから、海上輸送によると考えられる。

東からは、中尊寺金色堂に欠かせない「金」がある。寺塔已下注文「一毛越寺事」にても、基衡が仏師雲慶に「円金百両」を送っている史料⁹。円金は丸く加工された金のことであろうが、金自体は、どこで生産されたのであろうか。

産金遺跡研究会によると、天仁元(1108)年藤原清衡が奥州平泉の中尊寺境内に「金色堂」を起工した頃には、気仙郡世田米(現住田町)の野尻金山や小府金山で盛んに採金されていたという。これ以降も、玉山・雪沢・重倉各金山や、矢作の太子・琴平・枅内各金山(現陸禅高田市)、猪川の大野金山(現大船渡市)、下有住の八鉢・火ノ土両金山、世田米の清水沢金山(現住田町)で採金されていたという[註 23](図 i)。

このように、平泉の東に位置する気仙郡は、「砂金」の産地であった。

更に、斉藤利男氏によると、気仙郡は、太平洋の「海の道」を介した北方政策上の重要拠点であった。安部氏代には、三陸海岸から内陸の磐井郡にかけて勢力をはる気仙郡司金氏の本拠であり、近世は、造船を中心とする気仙大工の活動拠点であったらしい[註 24]。太平洋の「海の道」からは、食料となる魚介類や塩などがもたらされると考えられ、気仙郡は、砂金や豊富な魚介類がもたらされる場所であったといえる。

当時の政治は宴会儀礼であり、必ず料理は振舞われる。その品目は、京都で出されるものと同等か地元独自の料理がなければ、もてなす相手への示しが見つからない。そのためにも、気仙郡で採れた魚介類の獲得も、奥州藤原氏にとっては必須であったろう。第二章で詳しく述べるが、この気仙郡と都市平泉は、「気仙街道」という山道で接続した。荷物を運搬する人々がおり、その周りを兵が警護しつつ運搬されたと想像される。

以上のように、さまざまな職人集団が滞在し且つ往来したことと、非常に広範囲から品々が届くための陸上・海上ルートや神人などの組織活動が活発であったこと。この二点が無ければ、都市平泉は成り立たなかった。これは、権力者の一方的な整備だけでは実現することはできない。都市平泉は「古代都市」でなく、東北地方に聳える立派な「中世都市」だったのである。

これを踏まえ、次の章より都市平泉の景観を考察していくが、その前に、一般的な地方の「中世都市」の景観を見ておこう。

中世都市国府の一つ「多賀国府」は、古代では政庁しかなかった。中世になると、東北縦貫道「奥大道」の宿駅である「河原宿五日市場」や「冠屋市場」という商業地も取り込まれた。更に、その外側に、東宮・西宮・南宮・北宮の「境の神社」が置かれて都市への

入り口となった。その内部空間は、「府中」とよばれる、宗教的に結界された特殊領域となった。多賀国府ではないが、「府中」内には墳墓も存在する場合があり、死者の靈魂を鎮める供養の場となった。

このように、「府中」も、政治機能に加え、商業・交通・宗教上の機能も持つ複合都市であったのだ[註 25]。

では、都市平泉の場合はどうなのか。次の章から見ていこう。

- [註 1] 「都市平泉、その謎を解く 上」 斉藤利男、『月間百科 9』(1989 下中弘 平凡社)
「都市平泉、その謎を解く 下」 斉藤利男、『月間百科 10』(1989 下中弘 平凡社)
- [註 2] 『平泉 よみがえる中世都市』(1992 斉藤利男 岩波新書)
- [註 3] 『都市平泉の遺産』(2003 入間田宣夫 山川出版社)
- [註 4] 『市・宿・町』(1994 笹本正治)
- [註 5] 『図解 日本都市史』(1993 高橋康夫ら 財団法人 東京大学出版会)
- [註 6] 「平泉藤原氏の支配領域」 八重樫忠郎、『平泉の世界』(2002 入間田宣夫・本澤慎輔 編 高志書院)
- [註 7] 「中世都市平泉に生きた人々」 岡陽一郎、『アジア遊学 102 号 特集：東アジアの平泉』(2007 勉誠出版)
- [註 8] 「中世都市論」 網野善彦、『岩波講座 日本歴史 7 中世 3』(1976 岩波書店)
- [註 9] 「平泉かわらけの系譜と成立 ～土器から見た「古代」と「中世」の二重構造～」 井上雅孝、『兵たちの時代Ⅱ 兵たちの生活文化』(2010 入間田宣夫 高志書院)
- [註 10] 「みちのくの古鐘生産」 五十川伸矢、『兵たちの時代Ⅱ 兵たちの生活文化』(2010 入間田宣夫 高志書院)
- [註 11] 「京都七条町から列島諸地域へ ～武士と生産・流通～」 野口実、『兵たちの時代Ⅱ 兵たちの生活文化』(2010 入間田宣夫 高志書院)
- [註 12] 『日本中世の民衆像 ～平民と職人～』(1980 網野善彦 岩波書店)
- [註 13] 「都市のできる場 ～中州・河原・浜～」 網野善彦、『増補 無縁・苦界・楽 ～日本中世の自由と平和～』(1996 網野善彦 平凡社)
「市のたつ場 ～平和と自由～」 網野善彦、『増補 無縁・苦界・楽 ～日本中世の自由と平和～』(1996 網野善彦 平凡社)
「無縁・苦界・楽」 網野善彦、『増補 無縁・苦界・楽 ～日本中世の自由と平和～』(1996 網野善彦 平凡社)
- [註 14] 『日本中世の民衆像 ～平民と職人～』(1980 網野善彦 岩波書店)
- [註 15] 『平清盛 福原の夢』(2007 高橋昌明 講談社)
- [註 16] 「序章 中世とはどのような時代か? ～中世前期～」 戸田芳美、『初期中世社会史

の研究』(1991 戸田芳美 東京大学出版会)

[註 17]「第 7 章 初期中世武士の職能と諸役」戸田芳美、『初期中世社会史の研究』(1991 戸田芳美 東京大学出版会)

[註 18]「王朝都市と荘園体制」戸田芳美、『岩波講座 日本歴史 4 古代 4』(1976 岩波書店)

[註 19] その大型渥美産陶器は、口の形状から経塚として用いられたのではないかと考えられている。

[註 20] 宋版一切経の招来について、菅野成寛氏は、一切経の下限整年が 1151 年であること、納入先の中尊寺の宋版一切経の本尊である文殊五尊像の制作年代も 1150 年代とされることから、基衡の晩年ではないかと推測している。

※「中尊寺『宋版一切経』の舶載」菅野成寛、『アジア遊学 102 号 特集：東アジアの平泉』(2007 勉誠出版) より

[註 21] 『奥州藤原三代』(2011 斉藤利男 山川出版社)

[註 22] この点は、菅野成寛氏も斉藤利男氏も強調している。

[註 23] 『黄金の在処と行方 ～気仙地方とその周辺の産金遺跡～』(2011 産金遺跡研究会)

[註 24] 「都市衣川・平泉と北方世界」斉藤利男、『平泉・衣川と京・福原』(2007 入間田宣夫 高志書院)

[註 25] 「I 古代・中世の交通と国家」斉藤利男、『日本の社会史第 2 巻 境界領域と交通』(1987 岩波書店)

第一章 都市中心部の景観と都市機能

序章では、これまでの研究史を振り返り、筆者の抱く問題点を提示した。

更に、都市平泉が「中世都市」であることを確認した。

ここからは、具体的に、都市平泉内の各地域の景観復原と、その地域が果たしてきた都市機能について考察していく。

まずは、中尊寺や毛越寺などの聳える都市中心部（以下「平泉」と称す）について見ていこう。ここからは、「平泉・祇園復原図（1/5000）」（図 H）を基に述べていく。

結論から述べると、平泉は、政治上でも宗教上でも都市平泉の「原点」であり「中核」としての機能を果たしたと考える。

第一節 政庁・屋敷・道路・諸施設の配置

平泉には、奥州藤原氏当主および一族の住んだ屋敷や政治を執り行う政庁跡、道路跡や諸施設が、これまでの発掘調査において数多く発見された。

まず、政庁について。

この役割を果たしたのは、（図 H）の「平泉館（柳之御所）」である。

寺塔已下注文「一 館事秀衡」には、金色堂の正方・無量光院の北に「平泉館」という「宿館」が存在したとある[史料 3]。正方とは、金色堂の真正面と考えられ、実際、東を正面に建っている。且つ、無量光院の北をも満たす場所に「柳之御所遺跡」がある。「宿館」から、政治拠点で且つ日常生活を送る場所でもあったと想定される。以前は、秀衡の屋敷跡だと考えられたが、清衡期のかかわりが発見されたため、藤原清衡・基衡・秀衡の三代にわたり使われたことが分かった。

柳之御所遺跡は、丘陵末端部の標高 25m 前後の河岸段丘に立地する、面積 110000 m² もの面積を有する遺跡である。斉藤邦雄氏によると、上幅約 10m 規模の二重堀で囲まれ、大型の建物跡や園池跡のある堀内部地区と、堀を隔てて堀内部地区の北西方向高館跡の南麓に位置する堀外部地区に分けられるという[註 1]。

堀内部地区からは、幅約 7m の道路側溝が見つかり、秀衡が、自身の邸宅である加羅御所遺跡と柳之御所遺跡を往来した可能性が考えられている。中心域からは、馬蹄形をした大きな園池が見つかっており[註 2]、その北側には、4 間×5 間の西建物と 4 間×9 間の東建物という格式高い四面庇建物群が展開する。井戸跡やトイレ状遺構も多く見つかり、井戸跡からは、大量のかかわりや陶器類・木製品が出土している。かわらけは、ほぼ完全に近い形で出土が多く見られ、渥美産・常滑産・珠州産陶器や、中国産の白磁・青磁・青白磁

器も発見されている。木製品は、糸巻き・下駄類・折敷・箸・篋・刷毛・椀などの食器類、格子・破風板・土壁などの建築部材・金槌・鑿・銅印・小札・刀子なども発見されている。

西建物と東建物の設置は、基衡期と考えられている。というのも、羽柴直人氏や斉藤利男氏によれば、清衡期は堀内部地区北側に集中したからである[註 3]。そこから現地を眺めると、後述する本町遺跡や衣河など、安部氏代の奥六郡を一望できる位置に立地している。

そこから基衡期になって、中心建物が「金色堂の正方」すなわち西側から金色堂を眺められるように南部地区へ移築された。西建物には池も隣接し、国司など、外からやって来た役人との謁見及び儀式を執り行なう場と考えられている。東建物は、その規模から、家臣団の合意形成を行なう場に使われたと考えられている。広場や厨・厩も完備されており、中央から派遣される国司との関係を重視した結果と思われる。

秀衡期になると、中心建物はそのままに、清衡期から続く幅 7m の一重の堀を埋め、その内側に幅 14m 深さ 5m の一回り規模の大きい周壕を構築した[註 4]。この大改造は、1170 年代から行われたとされる。日宋貿易が始まり、秀衡自身も鎮守府将軍に補任された時期であるため、この補任を契機に、中央と陸奥国に向けて自らの権威を知らしめようとしたと推測される。

以上より、堀内部地区は、政治そのものである宴会儀礼が行なわれた拠点であった。奥州藤原氏一族及び家臣団や国司などを招いて、盛大な宴会が催されたであろう。

一方、堀外部地区は、中央部を幅 8m の道路側溝が北西—南東方向に向かい、遺跡を縦断する。そこから井戸状遺構が発見され、立烏帽子が出土している。立烏帽子を身につけられるのは限られた身分であるため、奥州藤原氏の近親者あるいは重臣たちが住まいした場所ではないかと推測されている[註 5]。

柳之御所遺跡すなわち平泉館は、都市平泉の政治面を担う、政庁としての威厳や機能を失うことはなかった。

つづいて、屋敷の配置について。寺塔已下注文「一 館事秀衡」には、秀衡を含め、その子息である「国衡」・「泰衡」・「忠衡」・「隆衡」の「家」や「宅」も記されている[史料 3]。

一体どの場所に存在したのだろうか。

まず、秀衡の嫡子「国衡」と四男「隆衡」について。

寺塔已下注文には、「西木戸」に、嫡子「国衡の家」があったと記され、同じく四男「隆衡の宅」も並び立っていたともある。

国衡とは、秀衡の長男であり、その弟は泰衡であった。当腹（正妻である妻の腹）の生まれでなく、次男が当主となる伝統もあったため[註 6]、秀衡の後継者にはなれなかった。だが、秀衡が死去する際、大將軍となる源義経とし、泰衡とともに国務に参加するよう遺言したように[註 7]、平泉政権内では重要な位置にある人物であった。

この所在に関して、入間田宣夫氏は、「平泉館の西木戸」と捉え、平泉館の西側の入り口、

すなわち柳之御所遺跡の堀外部地区内にあったと述べる(図 C) [註 8]。確かに、その場所にて四面庇建物が発見されているが、50m 四方しかなく、国衡が住むには規模が小さい印象がある。一方、斉藤利男氏は、国衡が、秀衡と藤原基成の娘が結婚した 1151 年前後に生まれたと仮定すると、奥州合戦時は 40 歳前後になっていること、その合戦では一軍を率いる将として活躍し、ある程度の家臣や独立した屋敷を持つ可能性があるため、国衡館遺跡に所在すると述べている[註 9]。

そもそも「西木戸」の「木戸」とは、「城戸」とも表記し、城や柵・関の出入り口あるいは町の治安維持のために設置された門を意味する例もある[註 10]。「西側に位置する出入り口」という認識は、両者とも同じである。

ここで、藤原秀衡・泰衡期と同時期の京都の六波羅団地を見てみると、六波羅団地のすぐ南東、渋谷越という交通路に沿うように、平清盛の嫡男重盛の「小松殿」が立地している[註 11] (図 I)。交通の要衝を抑えるために設置されたと考えられる。岡陽一郎氏も、武士の居館は、主人の活動や物資の入手に便宜を図るため、領地内の水陸交通の要地に設けられたと述べている [註 12]。

改めて(図 H)を見ると、平泉にも奥大道が存在する。平泉を一つの団地を捉えると、ちょうど北西の「八花形」という台地上に、奥大道と隣接するように国衡館遺跡が存在する。「八花形」は、毛越寺・観自在王院前に、奥大道を隔てた南の太田川沖積地に張り出した南北に長い台地である。台地の北は方台形、南は不整形に整地されており、両者の中間の東部に空堀状低地があり、北の台地を東より北に廻った広く深い沖積層が大堀の形をなしている。その先は、台地をそのままにして、広い出入口としている[註 13]。

国衡館遺跡からは、12 世紀～12 世紀後半の 3 間×3 間の身舎を伴う四面庇建物や鍛冶遺構、12 世紀後半の手づくね小型かわらけ・中国産陶磁器・常滑産陶器なども発見されている[註 14]。

以上を踏まえると、「西木戸」は、平泉全体から見た「西の出入り口」と捉えられ、国衡の家は、奥大道を抑えられる国衡館遺跡にあったと考える。これに「相並ぶ」と考えると、「隆衡の宅」は、国衡館のすぐ南に隣接したと思われる。国衡と隆衡それぞれの従者も集住し、南から往来する人々の監視を行い、時には宴会を開いてもてなしていたのかもしれない。

次は、三男の忠衡について。

寺塔已下注文には、「三男忠衡家」は「泉屋の東」に在ると記されている。

現在でも、平泉町に「泉屋」という地名があり、泉屋遺跡からは四面庇建物も発見されている[註 15]。ただ、その場所は、厳密に泉屋の「東」にあるように見えない。

十分な根拠はないが、三男忠衡の家は、下衣川地区の南の戸河内地区にある「泉ヶ城跡」にあったと考える(図 f)。安永 4 年の磐井郡西磐井戸河内村風土記御用書上の戸河内村の「古館」に、戸河内川落合に「泉ヶ城」とある[史料 5]。文治年中は鎮守府將軍藤原秀衡三男

泉三郎忠衡の住居であり、後に「泉ヶ城」と呼ばれたという【註 16】。近世の伝承ではあるが、その東側には、衣の関道へと続く奥大道が通っている。北から往来する人々にとって泉ヶ城付近は、中尊寺そして平泉へと入る「入り口」である。

「西木戸」にて国衡が交通の要衝を抑えているならば、忠衡は、平泉の北側の入り口、すなわち「北木戸」にて交通の要衝を抑える役目を担っていたとも考えられなくもない。

最後は、次男「泰衡」について。

寺塔已下注文には、無量光院の東門に「加羅御所」と呼ばれる一郭が構えられたとある。平泉館の南にあたり、秀衡の「常の居所」であった。居所ということは、日常生活を送るための御所であったと考えられる。泰衡も、秀衡から引き継いで居所としたとあり、泰衡の住まいであったことは明白だ。ところが、記録通りに無量光院「東門の一郭」を見ると、「常の居所」を構えるには困難なほどの小さい区画しかない（図 H）。

平泉館の南には、加羅御所遺跡がある。ここからは、12世紀後半の身舎2間×3間の四面庇建物1棟やトイレ状遺構、12世紀後半の手づくね大小皿形かわらけ、常滑三筋文壺などの「平泉セット」も発見されている。トイレ遺構から、日常生活を送っていたことは十分考えられる【註 17】。遺跡の北東端には、平泉館へ延びる土塁らしき跡も発見された。おそらく、秀衡が平泉館へ行き来するための道あるいは橋が設置されたのだろう。

以上を踏まえると、加羅御所は、現在の加羅御所遺跡に所在したと考える。「東門」とまでは行かないが、無量光院の東にある点では、記録と一致する。

ちなみに、加羅御所遺跡のすぐ南にも区画が存在する。十分な根拠はないが、おそらく奥州藤原氏の家臣団屋敷があったと思われる。

今まで述べた政庁や屋敷を行き来するために、道路も整備された。

寺塔已下注文「一 高屋事」によると、「観自在王院南大門南北路」に、「東西に於いて数十町に及んで倉町を造り並ぶ」とある【史料 3】。「南北路」とは、（図 H）中のように、観自在王院の南と北に位置する東西路と考えられる。北は「⑩」、南は「②」と番号をつけている。

これまでの発掘調査でも道路が発見されており、羽柴直人氏は、それを基に平泉の道路の変遷を説明している【註 18】。そのデータを基に、平泉の道路について述べていく。（図 H）には、赤い線で表示し、①～⑮まで番号を振っている。⑰については、第二節(2)無量光院にて説明する。

まず、「①-a」は、奥大道から柳之御所遺跡堀外部地区へ通じる道。幅は約10m。「①-b」は、柳之御所遺跡堀内部地区を東西に走る道。幅は約8m。

「②」は、毛越寺南辺を通り、低位段丘の東端すなわち平泉の東端に至る道。現在の町道立石中屋敷線を踏襲し、道路側溝を基に考えると、幅約20m・距離1kmにも及ぶ。毛越寺から延びる、平泉のメインストリートであった。

「③」は、泉屋遺跡と柳之御所遺跡堀内部地区を結ぶ道。堀内部地区を幅 7.5m～10.5m で縦貫した後、鈴沢の池も、その北側は幅約 10m、南側は幅約 20m と、道路幅が異なる状態で縦貫する。

「④-a」は、志羅山遺跡 46 次・66 次・74 次から検出された道。幅は約 7～8m であり、太田川岸までは延びず、低位段丘の突出の基部を切る「⑩」の道で停まるように設置されている。「④-b」は、志羅山遺跡 66 次・69 次・78 次・80 次から検出された道。これは「④-a」と連続するが、「②」との交差点を境に軸方向が変化する。幅は約 10m である。

「⑤」は、白山社への参道。現在の町道役場線を踏襲し、幅約 10m である。

「⑥」は、方形区画の東辺を通る道。幅約 15m で、「②」に接続すると思われる。

「⑦」は、観自在王院と方形区画の間の道。これは、中尊寺方面まで続く道で、12 世紀以前から奥大道を踏襲する道と考えられる。

「⑧」は、毛越寺と観自在王院の間の道。幅約 30m もあり、「②」に接続する。

「⑨」は、毛越寺の参道。毛越寺南大門から大泉ヶ池の橋を渡り、円隆寺へ至る道が設定されている。幅は確認できなかった。

「⑩」は、低位段丘の東端を南北に走る道。羽柴氏は、この道路に沿って太田川の旧河道が流れていたと推定しているが、筆者は、太田川の旧河道は別な場所に存在したと考えている。これについては、第二章第二節で詳述する。

「⑪」は、低位段丘の突出の基部を通る道。低位段丘が南側に突出している部分の基部を東西に横切る道で、幅は約 7m。西側に連続し、沖積低地と低位段丘の境界線を通る道になる可能性が高いと考えられている。

「⑫」は、花立溜池を横切り「③」に接続する道。現在の町道花立線を踏襲しており、通称「なかみち」と称されているらしい。

「⑬」は、方形区画の北辺を走る道。現在の町道診療所線を踏襲し、この道を西側に延長すると、方形区画の北辺に概ね重なり、「⑦」にぶつかるまで延びたと考えられている。幅は不明だが、「②」と平行に走っていたと推測される。

「⑭」は、「④-b」から無量光院の東部まで接続する道。これは推測ではあるが、白山社の参道として「⑤」が存在するなら、「②」と「④-b」を通ってやって来た旅人が、無量光院まで行くための参道は不可欠である。

発掘報告書を見ると、「⑧」・「⑦」・「⑥」・「⑤」・「④-b」は、400 尺 (122.3m) ずつ等間隔に南北に延びている。この道の間隔から、「④-a」と「③」の間、「④-b」と「③」の間にも、「⑮」の道路が存在したのではないかと考えられている[註 19]。まさに、メインストリートの端から端まで、規則的な地割が施されていた。

奥大道は、善阿弥・日照田に沿って毛越地区内を北上し、「②」・「⑦」を経て金鷄山の横を北上して中尊寺に通じたと思われる。毛越地区内のルートについては、「奥州平泉旧跡略図」において、奥大道が寿徳院と寿命院の側を通っているため、そのように復原した[註 20] (図 J)。

これらの道路に沿うように、諸施設も建設された。

まずは、寺塔已下注文「一 高屋事」にある、「数十字の高屋」の建つ「倉町」である。観自在王院の迎いにある倉町遺跡では、12世紀第2四半期～1189年に存在したと思われる、4間×2間の大型掘立柱建物2棟が出土している[註21] (図K)。正倉院のような校倉造であったとされる。「数十字」は大げさであり、2棟の建物の間には広場が存在する。この広場には近世の掘立柱建物しかなく、中世遺構は溝のみだ。明確な根拠はないが、南からやって来た神人が交易品を携え、有力者と謁見する場所ではないかと考える。

つづいて、「同院西面南北」に有った「数十字の車宿」である。「同院」は「観自在王院」を指し、その西側にある「⑧」の道路の南北にわたって「車宿」が設けられた。車宿とは、牛車の駐車場である。「数十字」ではないが、実際に跡も発見され、記録と一致する。牛車に乗って都市中心部へ来た高貴な人々が、その入り口である毛越寺と観自在王院を参詣するために、牛車を駐車した光景が想像できる。

更に、「②」の道路沿いには、志羅山遺跡や泉屋遺跡もある。2つの遺跡からは、四面庇建物などの掘立柱建物群や井戸状遺構、手づくねかわらけやロクロかわらけ、常滑三筋壺・渥美刻画文壺といった「平泉セット」や中国産陶磁器、櫛・刀子・ものさし・曲物・扇の骨・箸といった木製品、鴛鴦文轡などの金属製品、馬の頸と骨も発見され、日常生活を送った人々の存在を窺わせる[註22]。どの建物も3～4m小高い場所にあり、馬の頸や骨の発見から、厩や厨も付属したことが想定される。

ここには、どのような人々が住んでいたのだろうか。『吾妻鏡』を見ると、秀衡の側近として、豊前介実俊や橘藤五実昌という平泉政権のスタッフも登場する[註23][史料6,7]。また、数代郎従「河田次郎」や郎従「由利八郎」などもある。彼らには本拠地があるが、都市平泉へ出勤する際は、滞在するための屋敷が必要となるはずだ[註24]。志羅山遺跡や泉屋遺跡は、そのような平泉政権を支える下級貴族などのスタッフが、従者や家族とともに日常生活を送る場所、もしくは一時的に滞在する場所であったといえよう。

ちなみに、斉藤利男氏は毛越寺の支院も存在したと述べ、居住施設と宗教施設が混在する鳥羽・白河のような景観が広がっていたと推測している。これに関しては、第二節(2)毛越寺にて詳述する。

以上、政庁や屋敷群の所在について長々と述べたが、平泉は、都市平泉の「政治面」を担う人々が集住する「中核」都市として機能した。

第二節 宗教施設の配置

平泉には、中尊寺・毛越寺・無量光院、鎮守社も勧請された。これらの寺社は一箇所に集中せずに建立されているが、一体どこに、なぜ各々の場所に各々の宗教施設があるのだろうか。ここからは、宗教施設の果たした役割について見ていく。

(1) 中尊寺

平泉の西北、「関山」にあるのが中尊寺だ。関山は、奥六郡すなわち蝦夷の地と陸奥国管轄下の境界にある。中尊寺の伽藍群は同時に建立されず、いくつかの変遷があった。

その概略は以下の通り。康和年間（1099～1104）に、清衡が江刺郡豊田から磐井郡平泉へ居館を移した後、長治2（1105）年、最初の伽藍として方形二層の楼閣「多宝塔」が落慶。山頂には一基の塔が建ち、二つ合わせて初期中尊寺のシンボルとなる。嘉承2（1107）年には、大長寿院とも呼ばれる「二階大堂」が落成。翌年の天仁元（1108）年には釈迦堂が落成。天治元（1124）年に中尊寺金色堂が上棟され、大治元（1126）年、中尊寺「鎮護国家大伽藍一区」の落慶法要が行なわれた〔註25〕。

最初に建立されたのは「一基の塔」と「多宝寺」である。

「一基の塔」は、寺塔已下注文「一 関山中尊寺事」に「当国の中心を計り、山頂に一基の塔が建った」とある〔史料3〕。「当国」は、管轄下である陸奥国を指す。中尊寺内で山頂となり得る場所を探すと、(図H) 中「釈尊院」の西に防火水道貯水池がある。現時点で最も標高の高い場所にあるので、ここに建立されたと考える〔註26〕。

「多宝寺」は、「寺院の中央」にあり、中に釈迦・多宝像が左右に安置された。多宝如来とは、諸仏が法華経を説く際、宝塔を出現させて説法を讃嘆することを誓った仏である。斉藤利男氏は、この「二仏並座」の多宝塔は、『法華経』見宝塔品第11の場面すなわち釈迦の法華経説法と巨大な多宝塔の出現、塔内への釈迦・多宝如来の並座、三千三代世界の仏土化という『法華経』のクライマックスシーンを具体化したものと述べている〔註27〕。初期中尊寺の段階から「寺院の中央」にあったと考え、現在の大長寿院にあったと推測される(図f)。

ここで、『法華経』とは天台宗の根本經典であり、仏の前では、いかなる人々も絶対平等であるという思想だ。そもそも天台仏教は、いかにして奥州にもたらされたのだろうか。菅野成寛氏は、清衡が叡山勢力と接点を持ったのが陸奥守源有宗の任期中（1095～1098）と推測し、11世紀後半の山門鎮守日吉社の王城鎮守二十二社体制への編入、12世紀初頭の大宰府寺院への進出の中で、清衡が招き寄せて中尊寺を建立したことにより、山門勢力が唯一北奥社会まで進出したと述べる〔註28〕。『法華経』の到来によって、仏の前では、蝦

夷も中央に属する人々も関係なく平等に救いを施されたのである。

中尊寺内には奥大道も通っていた。寺塔已下注文「一 関山中尊寺事」には、「多宝寺に釈迦・多宝像が左右に安置され、その中間に関路を開き、旅人往還の道とする」とある[史料 3]。しかし、多宝寺内の釈迦像・多宝像の中間を通るように設置するのは不可能だ。次の文章に「釈迦像を一百余体安置する釈迦堂」が記されているため、釈迦堂と多宝寺の中間を通るように設置されたと思われる(図 f)。あらゆる旅人の通れる道が、寺院内に存在することは異例である。

奥大道は従来、北の衣川内にある「たたら石」へ通じたと考えられた。だが実際に辿ってみると、傾斜が急で、上るのも下るのも困難であった。中尊寺内と衣川を接続する奥大道は、(図 f)のように、関山の尾根を西に緩やかに下った後、戸河内川の東側の陸地へ到達し、そこから衣河の「衣の関道」へと通じたと考える[註 29]。このルートの途中の谷から北を眺めると、長者ヶ原廃寺や大型屋敷群が真正面に見える絶景ポイントも発見した。所々に、休憩所を設けられそうな区画も見受けられた。「旅人」が安全に「往還」することの出来る道だと考えると、尾根を緩やかに下る、このルートの方が妥当だと思う。

奥大道は、白河関から外ヶ浜まで通り、一町ごとに笠卒塔婆が設置される。これによって、安全な往来が保障され、法華経の救いが普く人々に施されたことであろう。

つづいて建立されたのが、「二階大堂」と「金色堂」。

大長寿院ともいう「二階大堂」は、藤島亥治郎氏が、多宝堂の北(現在の能楽殿の南西)にて、1m以上に及ぶ大礎石が14尺ごとに並び且つ四間以上に及ぶ巨大な建築物が発見されたと述べ、そこが二階大堂だと推定している。寺塔已下注文には、高さが5丈もあり、本尊に三丈の阿弥陀如来像・脇士に9体の丈六阿弥陀如来像を安置されたこととある。かなりの高層大規模建築であったと想像される[註 30]。

「金色堂」は、奥州藤原氏のミイラが安置されている堂である。基衡期には、金色堂の正方に平泉館が設置されるなど、都市形成の基軸にもなった。寺塔已下注文には、堂内に壇が三つ構えられて螺鈿が施されたこと、堂内に阿弥陀三尊・持国天と増長天の二天・六地藏が安置されたことが記されている。菅野成寛氏は、院政期に営まれた阿弥陀堂の中でも、奥州藤原氏歴代の遺体を納め、壇上に六体の地藏菩薩像が祀られた点に独自性を考えている。六体地藏は、故人の極楽往生を祈念するために供養され、持国天と増長天の二天は、一個の像として造営されたとも述べている。ミイラのまま安置されたのは、西方にある極楽浄土へ往って生ける、すなわち再生を意味する「往生」を表し、極楽往生者として奥州藤原氏を聖化することで、歴代の精神と身体を包摂したかったからだと主張する[註 31]。

たとえ死んだとしても、その後も生身仏となって都市平泉を守り続け、永遠の浄土世界を実現するために存在したといえる。

最後は、「鎮護国家大伽藍一区」。

中尊寺供養願文では、左右に二十二間もの廊が連なる「三間四面檜皮葺堂」や「三重塔婆3基」・「二階瓦葺経蔵1宇」・「二階鐘楼」・「大門3宇」・「築垣3面」・二十一間もの「反橋1道」・十間もの「斜橋1道」が設置されたとある[史料8]。

この所在に関しては、毛越寺か中尊寺伝大池周辺かで意見が別れている。

毛越寺説の根拠は、『吾妻鏡』の中尊寺の記事に、鎮護国家大伽藍について何も伝えていないこと、大規模な寺院を建立するスペースが伝大池付近では足りないこと、発掘調査により伝大池が未完成であったこと、毛越寺金堂円隆寺の翼廊が二期存在することが挙げられる。

一方、伝大池周辺説の根拠は、再調査にて伝大池跡が完成していたこと、大伽藍が収まる程度のスペースが存在したこと、中尊寺文書にて建武年間までに、毛越寺とは別に大伽藍が衰退変貌する様子が描かれていることが挙げられる[註32]。

これを受けて大池周辺の現地調査をしたが、左右両方に二十二間の廊を連ねることも「三間四面檜皮葺堂」を建立することも困難なほど、土地の規模が狭かった。伝大池付近は無理があると思えてならない。

改めて供養願文を見ると、鎮護国家大伽藍は白河上皇の御願寺として建立されたとある。伽藍のモデルは、白河天皇建立の法勝寺と考えられている(図N)。となると、清衡は、京都にいる中央政府とのつながりや、その人々が平泉に往来することを意識していたかもしれない。京都から来た人々にとっての都市中心部への入り口は、南に聳える「毛越寺」だ。

以上から、鎮護国家大伽藍一区は、毛越寺に建てられたと考える。そして、基衡は清衡の遺志を引き継いで、毛越寺を建てたのではないだろうか。

ちなみに、供養願文では、「鎮護国家」のために白河法皇・鳥羽上皇・待賢門院・崇徳天皇の健康と長寿を祈っている。だが、そう言っているにも関わらず、法勝寺金堂本尊で全宇宙の中心仏である毘盧舍那如来も、夷賊・怨霊調伏の仏である五大明王を祀る五大堂も設置されていない[註33]。

鎮護国家を成就させる伽藍や神仏が安置されていないと考えると、「鎮護国家大伽藍一区」の造営によって、表向きは中央政府に従うと見せながら、平泉は平泉で独自の思想を展開させようという意志が浮かんでくる。

以上、伽藍の所在について述べてきたが、見落としとしてはならないのは、「二階大堂」と「一基の塔」が衣河からのみ望めるということだ(図L)。奥大道の一部「衣の関道」から関山を眺めると、「二階大堂」跡に聳える「かんざん亭」が明瞭に見える。斉藤利男氏は、後三年合戦を終えた藤原清衡が、陸奥国を南北に分ける境界を越え、南に大きく開けた関山の地＝平泉の地に進出したことで、北奥の豪族から都や畿内・西国さらには大陸ともつながりを持つ「北方の王者」へ成長しようとしたと分析している[註34]。

この二つの伽藍は、清衡が、自らが北奥の出で且つそれを乗り越えようとする存在とし

て、自らの決意を奥六郡の人々に知らしめるために、北を意識して建立したと思われる。

寺塔已下注文には、中尊寺の「寺塔」が「四十餘宇」、そして「禅坊」が「三百餘宇」あったとある。関山内に寺塔 40 宇は考えられそうだが、僧侶が日常生活を送る禅坊が 300 宇もあったとは思えない。ちなみに、寺院には、仏法を専ら行なう「学侶」と下の身分の「行人」がおり、食事の世話など日常生活を支える使用人が仕える組織構造をとる。

確かに、中尊寺という大寺院を支えるためには、学侶の日常生活を送る場所や必要な物資と報酬、伽藍の修理費、法会を行なうための物資が必要である。これらは売買交易を行なうことで手に入るだろうが、このような経済活動は俗的な活動とされ、学侶自身が行なうわけには行かなかった。

そのような中で、中尊寺の経済活動を支えたのは、関山北東の麓の「北坂下」という場所であった(図 f)。「坂下」とは、聖的空間である「山上」に対して、俗的活動・経済的活動を行なう「俗的空間」を指す[註 35]。天台仏教本山である延暦寺には、京都側に西坂本・近江側に東坂本があり、現在の坂本地区に東坂本が存在したという。その中の上坂本は日吉社の門前として、衆徒や山徒と呼ばれる僧侶が住んでいた。琵琶湖湖岸にある下坂本には、琵琶湖水運の要衝地となる港湾都市が形成されていた[註 36]。

北坂下に位置する坂下遺跡からは、四面庇建物 1 棟を含む 12 世紀後半の掘立柱建物や池状遺構、敷石を伴う道路状遺構も発見されている。遺物も、ロクロかわらけと手づくねかわらけが多く出土するとともに、12 世紀後半の渥美産甕・壺・鉢、常滑産甕・鉢・片口鉢、須恵器系甕・壺・片口鉢、中国産白磁碗・壺・皿、鉄釘などが発見された[註 37]。

北坂下は衣川に面しており、付近に荷揚げを行なう湊が設置された可能性がある。そこまで日吉神人が往来し、陶器類などを獲得したのかもしれない。また、敷石を伴う道路跡も、(図 D) のように、衣河や白鳥館遺跡の陸上道路とも接続している。この道路は、南坂本を経て平泉館の堀外部地区や奥大道に接続したと考える。

「坂下」に構えられる僧侶の屋敷は「里坊」と呼ばれており、北坂下の麓に、学侶の住む里坊も多く建ち並んでいたことであろう。

更に、比叡山延暦寺には、東谷・西谷・南谷・北谷という場所が存在し、そこに学侶が日常生活を送るための禅坊が存在した[註 38]。中尊寺にも、東西南北に谷が存在し、現在でも階段状に諸施設が立地している。本山延暦寺と同様に、かつてはそこにも里坊が建っていたことであろう。

以上、中尊寺の伽藍配置を述べてきたが、「人々に普く平等な救いを施す」という『法華経』の教えを浸透させるには、多くの人々が直接体感することができるよう、「開かれた」寺院として整備されなければならない。そして、中尊寺の中に奥大道を通し、更に白河関から外ヶ浜にかけて一町ごとに笠卒塔婆を設置することで、中尊寺から発せられる思想が全土に広がるように工夫された。京都や鎌倉のように、天皇家というごく限定された人々

にのみ、救いが施されるような「密教」的なものとは理由が違う。

前九年合戦・後三年合戦という中央の思惑が原因で、多大なる被害を被ったにも関わらず、敵味方関係なく全ての人々が成仏し、そこに往来する全ての人々に救いが与えられる世界を構築したかった奥州藤原氏の思いは計りしれない。

中尊寺は、陸奥国の中心から、都市平泉の「原点」ともいえる『法華経』の思想を、奥六郡と南側の陸奥国へ広める中心として存在し続けたといえる。

(2) 毛越寺と観自在王院・無量光院

毛越寺は2代目の基衡、観自在王院は妻である安部宗任の女によって、無量光院は3代目の秀衡によって建立された。それぞれの建立の目的や機能について考察していこう。

まず、毛越寺と観自在王院について(図M)。

毛越寺の南正面には、寺塔已下注文「一 毛越寺事」中の「二階惣門」と思われる南大門があった[史料3]。寺塔已下注文にて、南大門に寺領を安堵する旨を記した壁書が貼られたとあり、多くの人々の目に触れる壮大な門であっただろう。発掘調査では、この東西に厚さ24尺・高さ10尺の築垣が取り付けられていた[註39]。

金堂である円隆寺は、丈六の薬師如来を本尊とし、左右には長大な翼廊が付く。その翼廊の先には、東側に鐘楼・西側に経蔵と思われる区画がある。薬師如来は衆生の救済を施す仏であり、菅野成寛氏は、その勸請によって中尊寺の補完的な役割を果たしたと述べている[註40]。円隆寺の北西には講堂、東側には法華堂と常行堂の跡も残されている。「吉祥堂」と「千手堂」の所在は分からないが、円隆寺の西側には「嘉祥寺」があり、その本仏にも薬師丈六が安置されていた。

中尊寺が北側からよく見えるのに対し、毛越寺は南からのみよく見える。これに関して入間田宣夫氏は、毛越寺が白河の法勝寺の堂塔をモデルとしたと述べ(図N)、白河が東国・北国方面の旅人が入京する玄関口であるのと同様、毛越寺は、都市平泉の南の玄関口に造営されたと推測している[註41]。

基衡が政権を担っていた時期、中央では鳥羽上皇が治天の君として君臨していた。斉藤利男氏は、清衡時代に成長しつつあった平泉政権を、京都の中央政府に認めさせ、奥州の平和を維持することが基衡の課題であったと述べ、鳥羽院への奉仕に務めつつ、北の世界における自己の勢力を認めさせ、都から赴任してきた国司と良好な関係を結んで共存することが基本的な政治路線であったと強調する[註42]。基衡期から、院に対する「貢金」や「貢馬」が始まっているため、基衡の視点が、清衡よりも京都や東国に向いていたことは明白だ。清衡からの思いを受け継ぎ、維持・発展させるためには、中央から干渉されるわけにいかない。

毛越寺は、京都や東国といった南から往来してくる人々に対して、中尊寺の思想を知ら

しめる、中尊寺の「補完」としての役割を果たした寺院であったと考える。

寺塔已下注文には、毛越寺には堂塔が 40 余宇、禅房 500 余宇もあったと記されており、中尊寺より規模が大きいことが分かる。毛越寺伽藍の西南には毛越地区があるが、この範囲内に堂塔や禅坊が全て入るのは難しい。ここで、志羅山遺跡第 66 次調査において、12 世紀中頃～12 世紀後半まで機能した池跡から「笹卒塔婆」が出土している。その中には、極楽浄土を願う「十齋日信仰」や密教的修法に関連するものがあり、宗教儀礼が行なわれた形跡がある[註 43]。また、(図 H) の「②」道路付近には、毛越寺の支院「白王院」が存在したらしい[註 44]。

以上を踏まえると、付図中の毛越寺中から志羅山遺跡及び泉屋遺跡にかけて、堂塔や禅坊も存在した可能性が考えられる。

毛越寺のすぐ東には、「観自在王院」が立地する。寺塔已下注文「一 毛越寺事」にもあるように、基衡の死後、妻である宗任の女によって建立された阿弥陀堂だ。本尊は阿弥陀如来であり、「大阿弥陀堂」と、その東隣に「小阿弥陀堂」が立地している。

観自在王院の前身は、基衡の居館であったと推測する人々がいる。例えば藤島亥治郎氏は、小阿弥陀堂が桁行七間・梁間三間という住宅的な建物であること、小阿弥陀堂と大阿弥陀堂の間に泉殿の遺跡があり、寝殿造系を思わせることを理由に挙げている[註 45]。しかし、平泉館が「宿館」であったことと、秀衡期になって「常の居所」の加羅御所が営まれたことから、平泉館内に居館もあったと考えるのが自然だと思う。入間田宣夫氏は国衡館遺跡ではないかと述べているが、平泉館までの距離が遠すぎるし、あらゆる旅人の目に晒されることを基衡が望んでいたとは思えない[註 46]。

中央との繋がりを深め、京都に倣った方形地割を取り入れたのが基衡なら、中央からやって来る人々のもてなしや滞在中の世話も、力を入れて行なったはずだ。観自在王院の前身は、迎賓館あるいは一時的に滞在するための邸宅群ではなかったか。すぐ西に車宿もあることから、強ち考えられなくもない。

つづいて、無量光院について (図 O)。

秀衡によって建立された持仏堂であり、寺塔已下注文「一 無量光院新御堂と号す事」によると「三重宝塔」もあったが、場所は不明である[史料 3]。「宇治平等院を模」したともあるが、異なる点もある。例えば、本堂自体に尾廊がないこと、中島が二つ設置され、秀衡専用の拜所を含めた西方建物・中間建物・東方建物も存在したことが挙げられる。また、無量光院の池が、平等院のそれよりも遥かに広いことも明らかになった (図 P)。宇治平等院が宇治川と一体になって存在するのに対し、無量光院は北上川が近くを流れていないため、池自体を拡大したと考えられている[註 47]。

無量光院で見落としてはならないポイントは、設計された場所である。平泉館の西、猫間ヶ淵の対岸に設置された無量光院は、菅野成寛氏によって、孟蘭盆会の日 (陰暦 7 月 15

日)とその翌日の清衡の命日には、日没の夕日が、本堂阿弥陀堂の背後にある金鷄山山頂に落ちるように設計されたことが明らかとなった [註 48]。

そして、無量光院と柳の御所遺跡との間に道路と思われる土塁跡 (図 H 中の⑰) と、志羅山遺跡および泉屋遺跡と無量光院の門まで続く道路 (図 H 中の⑱) も発見されている [註 49]。「⑰」は、秀衡が専用で通る道であり、拝所のある中島に行き来することが出来たのであろう。「⑱」は、民衆などが通る道であり、東門から無量光院の光景を見たと思われる。

無量光院は、嘉応 2 (1170) 年頃に建立される。この前後の時期は、中央の情勢が激動した。院政によって、官職をもつ貴族の合議制から、有力な貴族・寺社・武士を直接上皇が支配する政治形態に変化し、権力争いも、貴族内で多数派が少数派を陥れる方法から、武士を用いたクーデターへ変化した。保元元 (1156) 年には保元の乱が勃発し、武士自身が「武力があれば政権を握られる」と自覚するに至った。平治元 (1159) 年には平治の乱が発生し、武士の中でも平氏が政治の主導権を握った。その後、平家一門や親平家派の公卿を通じて国政を動かす「平氏政権」が樹立。嘉応 2 (1170) 年には日宋貿易が開始し、輸出品に木材・硫黄・漆器・金が、輸入品には銅銭・陶磁器・経典などがもたらされ、日本に貨幣経済が広まった [註 50]。

この情勢の中、秀衡は、嘉応 2 (1170) 年に鎮守府将軍に補任される。日宋貿易開始と同年代。中央政府は、貿易品として奥州産の砂金を手に入れたかったと思われる [註 51]。秀衡は、武士の台頭という情勢でも平泉政権が維持されるよう、中央から与えられた地位を利用し、それに柔軟に対応するの必要を感じたであろう。

以上より、無量光院は、京都の極楽浄土へのあり方を独自に取り入れた持仏堂であり、先祖をいつまでも敬い、その意思を受け継ごうと意識し続ける場であったといえる。

(3) 鎮守社

寺塔已下注文「一 鎮守事」にて、中央に「惣社」、東方に「日吉」と「白山」、南方に「祇園」と「王子諸社」、西方に「北野天神」と「金峯山」、北方に「今熊野」と「稻荷」が勧請されたとある [史料 3]。日吉社は山門延暦寺の鎮守、白山宮は加賀の白山本宮、金峯山が紀伊の金峯山、祇園と北野天神・今熊野と稻荷は、京都の洛中洛外の本社から勧請したものだ。菅野成寛氏は、「日吉」・「白山」・「金峯山」は靈山神、「祇園」・「北野天神」・「稻荷」が都市神、両方の性格を持つ「今熊野」に大別され、都市平泉への怨霊や疫病神の侵入を防ぐために圍繞するよう配置されたこと、靈山神の勧請によって河海交通・流通網の掌握を図ったことを述べている [註 52]。しかし、祇園社と王子諸社は、その南にも町並みが広がっているため、圍繞するよう勧請されたわけではなさそうだ。

それぞれの鎮守は、都市平泉のどこに勧請されたのか。これまでの調査を通し、全てではないが、その所在を考察してみたい。

まず、「南方鎮守」の「祇園社」と「王子諸社」は、祇園地区に八坂神社と王子諸社跡が残されているため(図 H)、その場所で間違いないだろう。「祇園社」は、商業の神様として崇められており、付近には「三日町」という地名もある。商業活動を安全に行うために勧請されたと考えられる。

次に、「西方鎮守」の「北野天神」は、毛越地区内に「天神堂」があるため、その場所ではないかと考える(図 H)。「金峯山」は、藤島亥治郎氏は、現在の「金鷄山」を指すと推測している[註 53]。寺塔已下注文「一 毛越寺事」には、毛越寺の鎮守に「金峯山」とあり、八重樫忠郎氏は、毛越寺の建物軸線の基準が、金鷄山山頂から南に伸ばした子午線で、そのラインが毛越寺東に位置する南北築地塀の中心線に重なると述べている[註 54]。このことから、現在の「金鷄山」は「金峯山」にあたりそうだ。安永 4 年の磐井郡西磐井平泉村毛越寺書出を見ると、金鷄山の東に「金峯山社跡」があり、本尊には蔵王権現が祀られ、往古より修験が峯入りし、勤行を行なった所であると記されている[史料 9]。同所には「子守社跡」と「勝手社跡」もあった[註 55]。

もともと金峯山は、山岳修行の舞台で、吉野山から山上ヶ岳一帯の山岳地帯の総称であった。修験道の主尊は蔵王権現であり、山上ヶ岳・八狂ヶ岳・釈迦ヶ岳を結ぶ山岳道として大峯奥駈道も設置された[註 56]。

改めて金鷄山を見ると、金鷄山の東に、花立廃寺跡のある小高い区画がある。この区画に「金峯社」を勧請し、金鷄山を「山上ヶ岳」と見立てることで、「金峯山社」を勧請したのではないだろうか。花立廃寺跡からは、12 世紀第 2 四半期の翼廊の付属した寺院と思われる礎石建物跡が発見された(図 Q)。しかし、安永 4 年書出の「子守社」と「勝手明神社」もあったという記述を考えると、翼廊つき建物でなくとも、(図 H)のように、中心に金峯山社・左右に子守社と勝手明神社を配置したと考えていいのではないだろうか。

ちなみに、「金鷄山」には経塚跡も残され、奥大道にも面し、都市平泉形成の際の重要な基準点となった。終章第一節で改めて詳述する。

次に、「中央惣社」は、これまで白山社跡と考えられてきた。しかし、南方鎮守の外にも町並みがあることや、中尊寺中と毛越寺中も含めて考えると、広範囲で捉える必要がある。ここで、前述した西方鎮守「金峯山社」の北から、12 世紀の堂跡と思われる礎石建物跡が発見されている[註 57]。その建物跡のすぐ西には「金峯社」、現在の白山社跡は東に位置する。以上より、「中央惣社」は、花立廃寺跡の北の礎石建物跡にあったと考える(図 H)。

続いての「東方鎮守」について、「中央惣社」の所在から、白山社跡は「東方鎮守」だと考えられる。だが、もう一つ「日吉社」もある。それは何処にあったのだろうか。安永 4 年磐井郡西磐井平泉村毛越寺書出によると、「しら山」という場所に、「白山権現社」と「山王権現社」が鎮座したとある[註 58]。「山王権現社」は、日吉神社の別名であるため、「日吉社」を指すと考えていい[史料 9]。更に、享和元(1801)年「御宮古今次第秘傳」中の「御宮往日画圖附當世ノ画圖」(図 R)という古絵図を見ると、東に「山王」すなわち日吉、西に「白山」が並座するように勧請されているのが読み取れる[註 59]。平泉舊蹟志にも、両

社が平泉館の西南に存在するとある[註 60]史料 10。以上より、現在の白山社跡に、白山社と日吉社の二つが「東方鎮守」として存在したと考える。

最後の「北方鎮守」について、「今熊野社」は、安永 4 年磐井郡西磐井平泉村毛越寺書出に、花立山の南にあると記されている。花立山は「金けい山の東」にあり、その南には「花立溜池」がある(図 H)。花立溜池は、近世期に用水のために拡大され、「今熊野社」が移築されたい[註 61]。以上を踏まえると、「今熊野社」は、花立溜池のすぐ南に勧請されたと推測する[註 62]。「稻荷社」は、毛越寺書出に「稻荷山」に所在するとあるが、特定することが出来なかった。

以上、鎮守社の配置を述べてきたが、見落としてならないのは、平安京の「王城鎮守」を模倣して勧請していないことだ。菅野成寛氏は、本来東方にある祇園本社が「南方鎮守」に、北方の北野天神本社が「西方鎮守」、南方の稻荷本社が「北方鎮守」、東方の今熊野本社も「北方鎮守」と、本社の方が全く踏襲されていないと指摘する[註 63]。斉藤利男氏は、王城鎮守二十二社のうち、中心王城鎮守三社を構成する「伊勢」と「八幡」と「加茂」、「春日社」が、都市平泉に勧請されていないことを重要視する。というのも、「伊勢」は天皇家の神、「八幡」は夷敵征伐の武神、「加茂」は京都を守護する神、「春日社」は摂関家である藤原氏の氏神であり、中央集権国家の論理が向き出しになっているからである[註 64]。都市鎌倉も、武神「八幡」を祀る鶴岡八幡宮を基軸に若宮大路を設置したほどだ[註 65]。

このような国家の論理が原因で、前九年・後三年の役を経験した奥州藤原氏を考えると、勧請したくないのも無理はない。独自に鎮守社を勧請なしえた背景として、比叡山との関係形成、白山神人との関わり、金峯山蔵王信仰の受容や熊野信仰の影響、「惣社」を創建するに至る契機という様々な要因が重なり合う中、何度も推敲されて形成されたと考えられている[註 66]。寺院や都市形成にあたって、独自に築き上げてきたつながりを活かし、「平泉の基準」でもって判断され勧請されたといえる。これらの鎮守の勧請によって、都市平泉の商売活動や日常生活の守護が図られたのではないだろうか。

[註 1]「柳之御所遺跡の概要」 斉藤邦雄、『アジア遊学 102 号』特集：東アジアの平泉 (2007 勉誠出版)

[註 2]池跡には、中橋が設置された時期と中島が設置された時期とが存在することが、発掘調査で明らかにされている。

[註 3]『奥州藤原三代』(2011 斉藤利男 山川出版社)

[註 4] 註 3 と同上。

[註 5] 註 1 と同上。

[註 6] 『人々給絹日記』を読み直す ～奥州藤原氏の政治権力の理解のために～ 太石直正

- 『兵たちの時代Ⅱ 兵たちの生活文化』(2010 入間田宣夫 高志書院)
- [註 7] 『吾妻鏡』文治3年10月29日条より。
- [註 8] 『都市平泉の遺産』(2003 入間田宣夫 山川出版社)
- [註 9] 斉藤利男氏の御教示による。
- [註 10] 角川出版日本史辞典』(2008 朝尾直弘ら 角川出版)
- [註 11] 『平清盛 福原の夢』(2007 高橋昌明 講談社)
- [註 12] 「平泉藤原氏と交通」岡陽一郎、『兵たちの時代Ⅱ 兵たちの生活文化』(2010 入間田宣夫 高志書院)
- [註 13] 『平泉建築文化研究』(1996 藤島亥治郎 吉川弘文館)
- [註 14] 『第90集 国衡館跡第9次・第11次発掘調査報告書』(2004 平泉町教育委員会)
『第85集 平泉遺跡群発掘調査報告書』(2004 平泉町教育委員会)
『第94集 国衡館跡第12次発掘調査報告書』(2005 平泉町教育委員会)
『第101集 倉町遺跡第6次・国衡館跡第13次』(2006 平泉町教育委員会)
- [註 15] 『第23集 平泉遺跡群発掘調査報告書』(1991 平泉町教育委員会)
- [註 16] 「安永風土記(2)」『宮城県史(28)』より。
- [註 17] 『第47集 平泉遺跡群発掘調査報告書』(1996 平泉町教育委員会)をはじめ、これまでの加羅御所遺跡の調査成果を参照。
- [註 18] 「平泉の道路と都市構造の変遷」羽柴直人、『平泉の世界』(2002 入間田宣夫・本澤慎輔編 高志書院)
- [註 19] 『第312集 志羅山遺跡第46,66,74次発掘調査報告書』(2000 (財)岩手県文化振興事業埋蔵文化財センター)
- [註 20] この略図は白王院所蔵。
- [註 21] 『倉町遺跡第1次 志羅山遺跡第11,12,19,20次発掘調査報告書』(1994 平泉町教育委員会)、
『倉町遺跡第4次発掘調査報告書』(2004 平泉町教育委員会)
『倉町遺跡第7,8,9,10次発掘調査報告書』(2007 平泉町教育委員会)
など、過去の倉町遺跡の調査成果を参照。
- [註 22] 『志羅山遺跡第13,15,16,17,18,20次発掘調査報告書』(1994 平泉町教育委員会)
『志羅山遺跡第69,71次発掘調査報告書』(1998 平泉町教育委員会)
『志羅山遺跡第75,77,78次発掘調査報告書』(1999 平泉町教育委員会)
『志羅山遺跡第46,66,74次発掘調査報告書』(2000 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化センター)
『第23集 平泉遺跡群発掘調査報告書』(1991 平泉町教育委員会)
など、過去の志羅山遺跡と泉屋遺跡の調査成果を参照。
- [註 23] 『吾妻鏡』文治5年9月14日条、文治5年9月23日条より。
- [註 24] 例えば、「河田次郎」は、『吾妻鏡』文治5年9月3日条に「肥内郡贅柵」にて主

人藤原秀衡を殺害したとあり、贅柵のある現在の秋田県大館市二井田贅の里と考えられている。「由利八郎」は、由利郡の由利郷を本拠地ではないかと考えられている。

※「平泉藤原氏と交通」岡陽一郎、『兵たちの時代Ⅱ 兵たちの生活文化』（2010 入間田宣夫 高志書院）より

[註 25]『奥州藤原三代』（2011 齊藤利男 山川出版社）

[註 26]齊藤利男氏も強調している。

[註 27]「八 奥州藤原氏の首都遺跡 ～平泉と衣川～」齊藤利男、『日本の対外関係 3 通交・通商圏の拡大』（2010 荒野泰典・石井正敏・村井章介 吉川弘文館）

[註 28]「平安期の奥羽と列島の仏教 ～天台別院・権門延暦寺・如法経信仰～」菅野成寛、『兵たちの時代Ⅲ 兵たちの極楽浄土』（2010 入間田宣夫 高志書院）

[註 29]齊藤利男氏も強調しており、『奥州藤原三代』（2011 齊藤利男 山川出版社）など、自身の著書でも、そのように復原している。

[註 30]『発掘された平泉 夢のあと』（1981 藤島亥治郎 川嶋印刷株式会社）

[註 31]「平泉の宗教と文化」菅野成寛、『平泉の世界』（2002 入間田宣夫・本澤慎輔編 高志書院）

[註 32]「平泉における寺院」八重樫忠郎、『中世都市と寺院』（2005 吉井敏幸・百瀬正恒編 高志書院）

[註 33]『奥州藤原三代』（2011 齊藤利男 山川出版社）

[註 34] 註 33 と同上。

[註 35]「都市衣川・平泉と北方世界」齊藤利男、『平泉・衣川と京・福原』（2007 入間田宣夫 高志書院）

[註 36]「中世坂下の都市的景観」吉永真彦、『中世都市と寺院』（2005 吉井敏幸・百瀬正恒編 高志書院）

[註 37]『坂下遺跡第 10 次発掘調査報告書』（2008 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター）

[註 38] 齊藤利男氏の御教示による。

[註 39]『平泉建築文化研究』（1996 藤島亥治郎 吉川弘文館）

[註 40]「平泉の宗教と文化」菅野成寛、『平泉の世界』（2002 入間田宣夫・本澤慎輔編 高志書院）

[註 41]『都市平泉の遺産』（2003 入間田宣夫 山川出版社）

[註 42]『奥州藤原三代』（2011 齊藤利男 山川出版社）

[註 43]『志羅山遺跡第 46,66,74 次発掘調査報告書』（2001 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター）

[註 44]齊藤利男氏の御教示による。

[註 45]『平泉建築文化研究』（1996 藤島亥治郎 吉川弘文館）

- [註 46]『都市平泉の遺産』(2003 入間田宣夫 山川出版社)
- [註 47]平泉委員会の資料より。
- [註 48]「平泉の宗教と文化」菅野成寛、『平泉の世界』(2002 入間田宣夫・本澤慎輔編 高志書院)
- [註 49]「平泉の道路と都市構造の変遷」羽柴直人、『平泉の世界』(2002 入間田宣夫・本澤慎輔編 高志書院)
- [註 50]『院政と平氏・鎌倉政権』(2002 上横手雅敬 中央公論社)
『平清盛 福原の夢』(2007 高橋昌明 講談社)
『院政の展開と内乱』(2002 元木泰雄 吉川弘文館)
- [註 51]「京都七条町から列島諸地域へ ～武士と生産・交通～」野口実、『兵たちの時代Ⅱ 兵たちの生活文化』(2010 入間田宣夫 高志書院)
- [註 52]「平泉の宗教と文化」菅野成寛、『平泉の世界』(2002 入間田宣夫・本澤慎輔編 高志書院)
- [註 53]『平泉建築文化研究』(1996 藤島亥治郎 吉川弘文館)
- [註 54]「安永風土記」『宮城県史』27 より
- [註 55]『史跡で読む日本の歴史 5 平安の都市と文化』(2010 増渕徹 吉川弘文館)
- [註 56]『花立Ⅰ遺跡第2,3,4次 白山社遺跡第3次 西光寺跡第2次発掘報告書』(2004 平泉町教育委員会)
- [註 57] 註 56 と同上。
- [註 58] 註 54 と同上。
- [註 59]この絵図は、白王院所蔵。
※『花立Ⅰ遺跡第2,3,4次 白山社遺跡第3次 西光寺跡第2次発掘報告書』(2004 平泉町教育委員会) より。
- [註 60]「平泉舊蹟志」、『仙台叢書』1 の所収。
- [註 61]齊藤利男氏の御教示による。
- [註 62]大石直正氏は、安永4年磐井郡西磐井平泉村毛越寺書出の、付近には「三十三間堂跡」が所在するという記述から、三十三間堂跡が今熊野社ではないかと推測している。しかし、正確な三十三間堂跡の所在は不明である。
- [註 63] 註 51 と同上。
- [註 64]『奥州藤原三代』(2011 齊藤利男 山川出版社)
- [註 65]「中世前期の都市と文化」義江彰夫、『講座日本歴史 3 中世 1』(1984 歴史学研究会・日本史研究会 東京大学出版会)
- [註 66]「仏教都市平泉とその構造 ～平泉の神社と奥州藤原氏～」齊藤利男、『兵たちの時代Ⅲ 兵たちの極楽浄土』(2010 入間田宣夫 高志書院)

第二章 陸上交通・海上及び河川交通の広がり と 都市機能

第一章では、平泉の景観と都市機能について考察した。

ここからは、平泉の営みを支える陸上交通・海上及び河川交通の広がり と、衣河・祇園・白鳥館遺跡・本町遺跡の景観と都市機能を見ていく。

第一節 陸上交通

都市平泉には、どのようなルートで陸路が通っていたのだろうか。

まずは、奥大道である(図 S)。奥大道は、寺塔已下注文や『吾妻鏡』文治5年9月27日条にあるように、白河関から外ヶ浜まで延びる中世の東北縦貫道路である。外ヶ浜とは、新田(1)遺跡の発見から、現在の青森県油川を指すと考えられている。ルートは、衣川を渡り、北上盆地を北上して岩手郡に至り、七時雨山西方の鞍部を越えて、現在の安代町(もとの糠部郡一戸の地)にはいる。そして、田山を経て鹿角盆地南部の小豆沢へ、さらに巻山峠を通過して比内郡独鈷に達する。更に、比内から矢立峠をぬけて津軽へ入り、津軽平野の東部を北上して外ヶ浜に至ったという[註 1]。このルートに沿って、一町ごとに笠卒塔婆が設置された。

しかし、交易品を運搬するため、陸路は他にもあった。

まずは、気仙街道である。ここからは、序章で述べた気仙郡の「砂金」や豊富な魚介類・塩がもたらされる。近世には、平泉や一関と気仙郡とを結ぶ「今泉街道」として存在し、三陸の海産物や塩を内陸に運ぶ「塩の道」であった。今泉街道のルートは、奥州道中の山ノ目宿を起点に東へ進み、仙台藩西磐井郡および東磐井郡の村々(現在の岩手県一関市)を経由し、松川・長坂(東山町)、摺沢・大原(大東町)の四つの宿駅を通過し、気仙郡今泉へ至るといふ[註 2]。それを基に斉藤利男氏は、平泉時代の気仙街道が、一関市相川から北西に向かい、東稻山南腹の東岳峠を越えて長部、本町遺跡に達したと述べる[註 3](図 D)。

気仙街道から本町遺跡までは、約 50km。若狭と京都を結ぶ通称「サバ街道」の鉢畑越と同じで、荷物を背負って朝早くに出発すれば、夕方には目的地に辿り着くほどの距離である[註 4]。

次は、「糠部駿馬」を運搬するための道(図 S)。

駿馬を運搬する場合、船だと馬が暴れた際に転覆する危険がある。これまでの研究によって、糠部から二戸・三戸方面を経、天台寺の麓を通過して奥大道へと合流する「馬の道」

と呼ばれる陸路の存在が明らかにされている[註 5]。

「馬の道」から奥大道に合流して都市平泉に入るわけだが、奥大道は、中尊寺内を通って平泉へ至る。寺塔已下注文に「旅人」往還の道と記されていることを考えると、馬などの「動物」は通ることが出来たのだろうか。筆者は出来なかったと考える。いくら関山の尾根が緩やかだとはいえ、何十頭もの駿馬を引き連れるのは骨の折れる作業で効率も悪い。駿馬は中尊寺内を通さず、衣河の途中で瀬原Ⅰ・Ⅱ遺跡へ通じる道に曲り、瀬原に沿って北坂下と南坂下を経て、平泉に運ばれたと推測する(図 D)。実際、明治初年の胆沢郡下衣川村地籍図を見ると、現在の衣里小学校の区画を巡るように、南下する道と東へ行く道がある(図 T)。衣里小学校の区画が関所となって、北方から来る人や物の、往来の采配を行なったのかもしれない。

更に、日本海と平泉を接続するルートもある。

斉藤利男氏によると、それは二つあり、一つは、奥羽山脈を越え、最上川を利用して庄内に下り、河口の酒田湊か田川郡由良、加茂湊に出るルート。もう一つは、奥羽山脈を越え、雄物川を利用して、雄物川河口の秋田湊、または途中から出羽山地を越えて、直接日本海岸の湊に出るルートであるという[註 6] (図 U)。

確かに、後世ではあるが、中尊寺文書に掲載されている中尊寺領のうち、出羽国は、田川郡の狩川村をはじめとする八ヶ所(現在の山形県東田川郡立川町)、秋田郡の雄友村や君野村(現在の秋田県由利郡岩城町)など、交通の要衝とされる場所が含まれている[註 7] 史料 11。寺領であるからこそ、成立しえたルートであるといえる。

以上のように、陸路には、奥大道・馬の道・気仙街道があった。

そして、平泉と日本海を結ぶ陸路と河川を交えたルートも存在した。

第二節 海上及び河川交通

交易品には、船に積み、海上及び河川を用いて運ばれたものもある。

それは、以下の①～③に大別される。

- ①北方の蝦夷からもたらされる品、
- ②国内からもたらされる品、
- ③宋からもたらされる品

①は、序章で述べた「鷺羽百尻」「水豹皮六十餘枚」、「干鮭」、「昆布」などが挙げられる。

これらは、北海道からの「太平洋ルート」と「日本海ルート」の二つを用いて運搬されたと考えられる。鈴木琢也氏によると、10世紀～12世紀、北海道の日本海沿岸～オホーツク沿岸石狩低地帯の河川河口域・下流域と、青森県岩木川水系河川河口域・下流域と、青森県岩木川水系河川河口域・下流域および青森県日本海沿岸の河川河口域・下流域を主体とする地域の間で、「日本海ルート」による物流・交易が展開したと述べている[註8]。このルートの本州での窓口は、日本海に注ぐ青森県の岩木川水系河口域の十三湊周辺地域とされる。北海道の日本海に接する港津地域に停泊しつつ、海流によって十三湊まで運ばれたのだろう。

更に、北海道太平洋沿岸の河川河口域・下流域と、青森県外浜の河川河口域・下流域の間で「太平洋ルート」による物流・交易が展開したとも述べている[註9]。このルートの窓口は、青森県青森市油川の「新田(1)遺跡」が考えられる(図V)。北海道の太平洋側に接する港津地域に停泊しつつ、海流によって新田(1)遺跡に到達したと思われる。

新田(1)遺跡では、12世紀頃の約5kgもの手づくねかわらけ、珠洲I期の四耳壺、渥美・常滑の陶器、白磁の碗・皿・四耳壺など、八重樫忠郎氏のいう「平泉セット」も発見されている。遺構では、「塗籠」の伴う5間×2間の身舎に四面庇が巡り、北側には又庇もつく、計7間×5間規模の東西棟の大型掘立柱建物が発見されている[註10]。斉藤利男氏は、この遺跡を、基衡時代後期～秀衡時代にかけて奥州藤原氏と密接な結びつきをもった豪族の本拠か、平泉の出先機動的な性格をもつ施設で、外ヶ浜・津軽海峡世界における平泉政権の支配を担った拠点集落であったと評価している[註11]。

以上を踏まえると、太平洋ルートより、交易品を携えてやってきた蝦夷集団は、新田(1)遺跡にいる有力者と謁見して交易品を貢納したと考えられる。その交易品は、河川や奥大道に乗り換えて、都市平泉へ運搬されたのだろう。

②は、「常滑産陶器」・「渥美産陶器」・「珠洲窯製品」といった国産陶器や「手づくねかわらけ」や「轡」といった京都発祥の製作技術、③は、「白磁器」・「青磁器」・「青白磁器」・「宋版一切経」などの南宋の品々、「犀角」・「象牙笛」・「水牛角」・「蜀江錦直垂」、「紫檀」・「赤

木」といった、アフリカ及び東南アジア産の、海のシルクロードを介した品物がある。

②と③は、南からの「太平洋ルート」と「日本海ルート」よりもたらされた。

まず、「太平洋ルート」について。八重樫忠郎氏は、シルクロードから来た品々が寧波に集約されたのち、黒潮本流に乗って先島諸島沿いを北東に進み、奄美大島付近で津島海流へ乗り換えて博多へもたらされ、水揚げされた文物が仕分けされた後、瀬戸内を抜け、紀伊半島を回って太平洋を北上し、宮城県石巻から川舟に乗り換え、北上川を遡上すると述べている[註 12] (図 W)。以上のようなルートを通して、交易品を運搬した担い手が、前述した熊野海民であった。

続いて「日本海ルート」について。斉藤利男氏によると、京都から街道を通って若狭湾に到着し、そこから日本海を渡って、第一節で前述した酒田湊へ着き、雄物川や最上川などの河川を伝って、奥羽山脈を越えて平泉へ至ったと述べている [註 13]。この交易の担い手となったのは、中尊寺と結んだ日吉・白山神人であった。

以上のような、北と南それぞれの「太平洋ルート」と「日本海ルート」が整備されたのはいいもの、都市平泉に到達するためには、一旦川舟に積み替え、河川交通を用いて運搬しなければならない。河川交通では北上川が使われたが、船が安全に停まるためには、どうしても「川湊」が必要となる。川湊は、大河川と小河川の合流地点が入江状の地形となっていて、流れが緩やかな場所に設置されることが多い[註 14]。

現地調査を行なうと、そのような場所が四つ見受けられた (図 D)。それは、白鳥館遺跡・衣河・本町遺跡・祇園である。

一つ目の白鳥館遺跡は、都市平泉の北に位置し、北上川と白鳥川が合流する。蝦夷地からの交易品を衣河へ届けるには、どうしても通過しなければならない場所だ。大正二年測量五万分の一地形図や近世の「下胆沢郡大絵図」(図 X)、明治 38 年河川台帳 (図 Y) を基に河川を復原すると、図のようになる (図 a)。北上川旧河道は、遺跡の北側より流れて湾曲し、遺跡の東側を流れる。遺跡の東側一帯は、通称「蛇の鼻」と呼ばれ、舟による往来が困難な難所である。北西方向から白鳥館遺跡に向けて流れる白鳥川は、一方では北上川旧河道と合流し、もう一方は南の低地部分を流れていたと思われる。

遺跡内でも現地調査を行なうと、南と北の二箇所に、入り江と思われる跡が見受けられた (図 Z)。(図 a) に、それぞれ①と②と表記してある。②は、奥に行くにつれて、細く掘り込まれている。そのため、人工的に作られたものと思われる。

この遺跡調査に携わっている及川真紀氏は、ここでの交易品の運搬過程について、北からやって来た舟が①に停泊して、そこから荷揚げした後、遺跡内の陸路を通り、②の入り江に停泊した舟に積み替えて運送すると想定している。

確かに、その方法が取られた時期はあったと思う。しかし、わざわざ荷揚げして陸路を渡り、また舟に積み替えるという作業は、あまりに非効率ではないだろうか。

筆者は、①と②の二つの入り江が、運河によって接続していた時期もあったと考える。実際、多賀城では、10世紀前半から11世紀にかけて、砂押川を結ぶ幅4.5mの運河跡が出土している[註15]。それだけでなく、淀川においては、延暦4年(785)三国川を開削し、多くの船が、神崎川から三国川を経て淀川を上下するという交通体系が整備されていた[註16]。古代の段階で、このような大規模な運河の開削が行なわれたのなら、白鳥館遺跡内に運河を造った可能性も十分考えられる。だが、残念ながら、それを証明する遺構は発見されていない。現段階では推測ということで、今後の発掘調査の成果に期待したい。

二つ目の衣川は、北上川旧河道と衣川が合流している。1979年撮影の空中写真を見ると、二つの河川の合流地点から接待館遺跡付近まで、一定の川幅であるのが見受けられる。更に、現地の方によると一定の深さもあるとのことだった。以上を踏まえると、そこまで船が入り込めたことが窺える(図b)。近くでは六日市場遺跡も発見されているため、六日市場付近が川湊となり、そこから物資を荷揚げしたと思われる。

三つ目の本町遺跡は、都市平泉の東に位置し、遺跡周辺地形分類図を見ると、発掘調査地付近に、二つの河川の合流跡が見うけられた(図c)。そのため、その合流地点に川湊が設けられたと思われる(図d)。

四つ目の祇園は、都市平泉の南に位置し、祇園Ⅰ及びⅡ遺跡と高玉遺跡の間に北上川旧河道の分流と思われる跡が残っている(図H)。実際、水害が発生した際には、(図e)のように、分流跡に沿って水が溜まり、北上川とも合流していた[註17]。また、三日町では、北上川旧河道と、太田川旧河道とが合流する地点も発見された。その合流地点の土地の傾斜も緩やかであった。以上より、三日町付近に川湊が設置された可能性が考えられる。

以上、四つの川湊があったからこそ、海上交通によってもたらされた交易品が、都市平泉に到達することが出来たと考える。

ここで、祇園以外の川湊の位置を見てみると、すべて北に集中している。白鳥館遺跡、本町遺跡から運ばれる交易品は、いずれは衣河へと集積されるというルートを進む。衣河は、交易センターとしての機能を果たしていたのである。

第三節 衣河

第一節と第二節では、都市平泉へ通じる陸上交通と海上及び河川交通が、どのようなルートを通っていたのかを見てきた。第三節～第六節では、これらも踏まえ、都市中心部の周辺に位置する衣河・祇園・白鳥館遺跡・本町遺跡に広がる景観と、各々の都市機能について考察していく。

まず、衣河は、安部氏代には奥六郡の最南端に位置し、衣川柵が設置されるなど、本拠地として機能した。その後は奥州藤原氏代にも継承され、結論から述べると、商業拠点・寺領・政治上の重要人物の住む拠点のある副都心として機能したと考える。

ここからは、「奥州藤原氏代の衣河復原図 (1/5000)」(図 f) を基に説明する。

衣河の景観を知る手がかりとなる記録が、奥州藤原氏代には2つ存在する。

一つ目は、「源義経が、衣河館で襲われた」という記述である。『吾妻鏡』文治5(1189)年閏4月31日条によると、源義経は、藤原基成の館である「衣河館」という場所において、そこで泰衡の軍勢に襲われ、持仏堂に籠り、自分の妻と子どもと共に自害したとある[史料12]。

藤原基成は、秀衡の妻の父(岳父)で、平治の乱の首謀者である藤原信頼の兄にあたる人だ。康治2(1143)年に陸奥守と鎮守府將軍を兼ね、久寿2(1154)年には民部少輔に補任されている。平治元(1159)年の平治の乱によって中央から配流されたが、平泉では政治顧問を務める重要な人物となった。文治5年8月25日・9月18日と26日条によると、基成には「三人の子息」もいた[史料14,15,16]。

「衣河館」に関しては、「民部少輔基成朝臣衣河館」や「前民部少輔基成宿館」とも表記され、政治拠点且つ居住施設として存在したようだ[史料12,13]。

では、どこにあったのだろうか。

斉藤利男氏は、基成クラスの貴族の邸宅の規模が、方一町すなわち約100m四方区画であり、その中に寝殿と対屋・対屋代廊・門を持つ構造であること、一般的に周囲は家臣屋敷で囲まれる構造であったことから、現地調査を行なった上で、(図 f)中の「⑤」に比定している[註18]。実際に、その比定地を歩いてみると、約120m×100m四方の区画で残っていた。その周りには「⑤」を囲むように、2箇所の「⑧」の区画(うち東側は70m×100m、南側は100m×50m)も立地する。

文治5年8月25日条では、奥州合戦終了後、衣河館にて、基成と3人の子息が千葉胤頼に捕えられ、降人となっている[史料16]。基成の陸奥守と鎮守府將軍兼任から46年も経っているため、3人の子息もとっくに成人し、一人一人独立した屋敷を持ってもおかしくはない。また、京下りの貴族ならば、自分の家族のみならず、周囲に日常生活の世話をする従

者がいてもおかしくはない。これも踏まえて、「⑨」の区画を、明治初年の胆沢郡下衣川村地籍図で確認すると、周囲が土塁で巡られたような跡が見て取れる（図 g）。

以上より、「⑤」が衣河館、「⑧」に3人の子息の屋敷、「⑨」に日常生活を支える従者が住んでいたと考える。

また、現地調査を行なうと、「⑩」の場所が、同じ規模で3つ存在する。斉藤利男氏は、基成のほかにも、鹿ヶ谷事件で後白河院近臣山城守中原基兼が解官・配流され、秀衡に迎えられ側近として活躍したことから、「⑩」には、そのような人達が住んでいたと推測している[註 19]史料 17。奥大道に接するように立地し、中央から配流された後、側近になった点を踏まえると考えられなくもないが、筆者自身、まだ明確な根拠を見出せていないため、現段階では、奥州藤原氏の家臣屋敷があったのではないかと考える。

また、『吾妻鏡』には、「肥後守藤原資隆入道母」や「平泉姫宮」と呼ばれた後白河院の落胤が平泉に下向して秀衡の保護を受けていたことも記されている[註 20]史料 18。この女性達も基成と同様、「⑤」・「⑧」・「⑨」付近に広がる区画に住んだ可能性が考えられる。その具体的な比定は、今後の課題である。

さて、肝心の源義経について、斉藤利男氏は、衣河に住んでいたとは述べているが、その具体的な比定までは発表していない。次は、その候補地を探してみたい。

源義経は、文治5年閏4月31日条に「持仏堂」にて自害したとある。衣河館にいたところを泰衡の軍勢に襲われたのにもかかわらず、文治5年8月25日条では、衣河館にて、基成と3人の子息が捕えられたということは、それまで衣河館は、被害を受けずに存在し続けたことになる。すると、「持仏堂」自体は衣河館とは別の場所、すなわち源義経の屋敷内にある「持仏堂」の可能性も考えられる[史料 12,16]。

ということで現地調査を行なうと、衣河の奥まった「⑥」の区画が土塁と思われる跡に囲まれて残っていた。源義経は、朝廷にとっては討伐すべき対象であったため、一番奥まった場所に設置することで、人目を避けるように奥州藤原氏に匿われたと思われる。

以上より、源義経は妻と子と共に「⑥」の区画に住んでいたと考える。また、家臣として、かの有名な弁慶もいるが、このような家臣達は「⑥」の区画を守護するように、「⑦」の区画に住んでいたと思われる。「⑦」の周囲が一段低い地形になっているので、屋敷の堀とも見て取れる（図 g）。

もともと衣河は、日本国の外にある、夷敵であった蝦夷の住む場所であった。しかし、源義経は、文治3（1187）年10月29日条にて、藤原秀衡から「大將軍」を任命されている[史料 2]。源義経と藤原基成の屋敷配置には、中央へは「かつての夷敵の地に配流された」と見せかけ、都市平泉の中では、源義経を「大將軍」として政治の中核を担わせるなど、中央へ良い顔をしつつ独自の政治形態を追求するという奥州藤原氏の意図が込められているといえる。

これまで述べた候補地は、発掘調査によって12世紀後半の遺構が出てきたわけではない。しかし、10世紀の安部氏の時代から存在した「①」の長者ヶ原廃寺が、そのままの区画で残されているため、これらも12世紀まで遡ることが出来るだろう。「①」の長者ヶ原廃寺については、この後すぐ詳述する。

衣河にも、奥大道が通っている。

ただ、衣河では、諸国からやってくる人々の通る道と、基成や義経らの通る道が別々にあったと思われる。というのも、当時災いは、ある共同体の外からもたらされると考えられたため、京都から配流された彼らは、旅人からの「ケガレ」を被ることを嫌ったと考えられるからだ。また、討伐の対象となっている源義経を大衆の面前に曝すようなこともしないはずである。

明治初年の胆沢郡下衣川村地籍図を見ても、南北を縦断する2本の道路が、「⑤」、「⑥」、「⑦」、「⑩」などの屋敷区画に沿った状態で設置されている(図g)。関山の中を通り、衣川を渡った段階で、(図f)のように、旅人の通る「④」の衣の関道遺跡方面への道と、基成や義経らが通る専用の道とで分かれていたと推定される。

ちなみに、「④」の衣の関道遺跡は、「七日市場」と「関谷起」という小字の間に属し(図g)、前者は標高約26~27m地点にあるのに対し、後者の標高は約24mと低くなっている。遺跡からは、前者より12世紀の掘立柱建物2棟とそれに伴う区画溝、州浜の伴う池状遺構、後者からはテラス状遺構などが発見されている[註21]。

この遺跡の側を奥大道が通ることを踏まえると、「④」の衣の関道遺跡には、関所のような建物があり、衣の関道遺跡方面の道か、基成と義経専用の道か、どちらの道を通るべきかを采配する役人が常駐したのかもしれない。池状遺構は奥州藤原氏代に設置された園地として、訪れた旅人の心を癒したのかもしれない。

二つ目は、「産業は亦た海陸を兼ね」という記述である。

これは、文治5年9月27日、源義経も奥州藤原氏も滅亡させた源頼朝が、衣河を訪れた際の様子が記された記録の一節である[史料19]。この記録自体は、かつては全て安部氏代の様子を描いたものと考えられてきた。しかし、よく読んでみると、安部氏代の様子を記したのは「宛如函谷」までの前半部分だけであり、後半部分即ち「左隣高山～」からは、頼朝が訪れた当時の、衣河の様子が記されているとも見て取れる。その証拠に、記録の中の「左隣高山右顧長途南北同連峯嶺」という一節を、実際に南を眺めると、左側には束稲山(高山)、右側には奥大道(長途)、南には関山丘陵、北には白鳥丘陵(峯嶺)が聳え立ち、記録と現風景が一致するのである(図D)。

この4つを一望できる場所に、ちょうど「①」の長者ヶ原廃寺が存在する。おそらく源頼朝は、長者ヶ原廃寺にて文治5年9月27日条を記したのであろう。

長者ヶ原廃寺では発掘調査において、10世紀末～11世紀前半にかけての、5間×4間の四面庇建物に南庇建物の付属した本堂跡・3間×3間の西建物跡・南門跡・築地塀跡などが発見されている[註 22]。

この遺跡の注目すべき点は、東西南北のすべての築地塀に、途中で途切れている開口部があることだ。長者ヶ原廃寺のすぐ西側には奥大道が通っているため、そこを通る人々から、中での様子が丸見えになってしまう。長者ヶ原廃寺の性格について、笹本衛氏は、10世紀～11世紀代を、村落寺院の消滅と同時に、中央権門寺社と本末関係によって形成された新たな山林寺院が成立した時代と捉え、国見山廃寺跡と同じ、関寺としての要素を持っていたと評価する。更に、天台教団らと結びつきあいながら寺院活動を行い、それらの流れが多宝寺・中尊寺へ継承されたとも推測している[註 23]。

あらゆる階層の人々が、誰でも寺内の様子を見られるということは、それだけ、寺内で行なわれる活動の効果を平等に受けられるということである。中尊寺内にも奥大道が設置されていることを考えると、中尊寺の先駆であることには納得である。

さて、「産業亦兼海陸」という一文自体は、「産業は海も陸も兼ねている」と解釈される。しかし、衣河には川しかない。それなのに、なぜ「海」なのだろうか。この一文における「海」と「陸」の意味について追求したい。

まず、「陸」について、序章で取り上げた糠部郡の「糠部駿馬」は、陸上で飼育されるものである。また、常滑・渥美・珠洲といった国産陶器、白磁・青磁・青白磁器といった中国産陶磁器も、陸上の窯で生産される。「陸」とは、陸上で生産される産物を意味すると考える。

「海」についても、「鷺羽」や「水豹皮」といった北海道やオホーツク海に生息する生き物など、「日本海ルート」と「太平洋ルート」を介して、海を生業とした人々によってもたらされた産物がある。「海」とは、海で生産され、海で運ばれた産物を意味すると考える。

このように、衣河には、南や北方などとの交易によって、陸で生産されたものや海で採れたものがもたらされたのである。そして、そのようなものが行き交う商業の豊かな場所だったと想像することが出来る。

では、衣河の中で「産業は亦た海陸を兼ね」を果たした場所は何処なのだろうか。

ここで、下衣川地区の地名を見ると、「六日市場」・「七日市場」など、市場に関する地名が残っている。それに関連して、「上宿」・「下宿」といった場所も残っている。もともと一つの宿であった状態から、需要の拡大に伴って「上宿」と「下宿」で名称が分かれたものと考えられる。

また、「②」の六日市場遺跡からは、遺構では、12世紀の薬研状の大型の二重溝、遺物では、12世紀初頭～後半にかけての手づくねかわらけ、常滑産陶器（種類は片口鉢・広口壺・甕）や渥美産甕、白磁椀、短刀、はさみ、釘、馬の歯と骨など、日用品を含めて数多く発見されている[註 24]。この二重溝より東には遺跡が広がっておらず、六日市場遺跡が衣河

の東端にあたると考えられる。

更に、第二節でも述べたが、この遺跡付近まで衣川が一定の川幅で流れている。そして、祇園以外の川湊が北に集中し、白鳥館遺跡や本町遺跡から運ばれた交易品が、衣河へと集積されるようになっている。

以上を踏まえると、「②」の六日市場遺跡付近が「産業亦兼海陸」を果たした商業施設であると考えられる。船によって運ばれた品々が、この遺跡で荷揚げされ、六日市場にて売買されたのであろう。湊も備えた商業施設として活気にあふれていたことだろう。

六日市場遺跡より西には、「⑭」の細田遺跡と「③」の接待館遺跡がある[註 25]。

細田遺跡では、12世紀後半の桁1110cm 梁888cmの四面庇建物1棟をはじめとした掘立柱建物群が発見されている[註 26]。この遺跡に関して、明治初年の胆沢郡下衣川村地籍図を見ると、丁度その区画が「宅地」として残っており、後世でも建物が建てられる場所であったと見て取れる。おそらく、「⑭」は、六日市場遺跡と接待館遺跡の区域を管理する、有力者が住んでいたと思われる。

接待館遺跡からは、12世紀後半の大型の二重堀が発見されている。遺物では、堀跡から、12世紀後半代の大量の手づくねかわらけ・11世紀～12世紀後半の白磁四耳壺などが発見されている[註 27]。白磁四耳壺は、「平泉セット」の一つである。安永6年の膽沢郡下膽沢下衣川村風土記御用書出には「セッタヤ（撰待館）」とあり、秀衡の母の居館と伝わっているとあるが[史料 21]、それを示す掘立柱建物跡が発見されておらず、信憑性はない[註 28]。斉藤利男氏や八重樫忠郎氏は、この遺跡について、周囲に陣幕を巡らせ、北からの交易品を持ってきた人々との謁見場所ではないかと評価している。堀の中の掘立柱建物跡が全て近世に属することから考えると、筆者も二人の意見に賛同したい。

衣河の川湊まで、荷を運搬した人々が訪れて、荷揚げを行い、「⑭」にいる有力者と、陣幕をめぐらした謁見場所にて宴会儀礼を行なった姿が想像される。衣河まで来るのにも相当の日数をかけたと考えられるため、荷を運搬した人々は、このあと後述する宿泊施設にも滞在したことであろう。

奥州藤原氏代ではないが、その時期の衣河にあったと考えられる施設を記した記録が、他にも3つ存在する。

一つ目は、「瀬原河原宿」である。文永9年6月23日の『関東下知状』に記されており、この名称の宿町が中尊寺院主職に付属した所領となっていたとある[史料 20]。

斉藤利男氏は、中世の瀬原村が現在の瀬原よりも広く、現在の奥州市衣川区下衣川と平泉町瀬原を合わせた地域に相当する「村」であったらしいと述べている[註 29]。ここから、その「瀬原村」の中の「河原」に設けられた「宿」であると読み取れる。

「宿」に関して、笹本正治氏は、交通の要衝で旅人が多く集まる地点か、その場所自体が旅人の目的地として選ばれる地点でなければならないこと、市と同一歩調で発展するこ

とを述べている。交通の要衝とは、いくつかの重要な道が集まる地点や川を渡る前後を指す[註 30]。

奥州市衣川区下衣川と平泉町瀬原のなかで相応しい場所を探してみると、六日市場遺跡のすぐ西側、すなわち(図 f)の「⑬」が、衣川にも面している。この地点は細田遺跡に属しており、発掘調査においても複数の掘立柱建物跡が発見されている[註 31]。六日市場遺跡で商売を行なう商人が宿泊するためにも、「⑬」に「瀬原河原宿」が設置されたと考える。

二つ目は、「七日市場」と「下宿」である。

「七日市場」は、安永6年の膽澤郡下膽澤下衣川村風土記御用書出に、「往古に駅場があったと伝わっている」とある[註 32]史料 21。現在でも、「⑩」に伝承地として残っている。近世の伝承ではあるが、そもそも「市」は、ある程度の空き地があり、物資輸送に便利な場所に設けられることが多い。七日市場のすぐ右側には奥大道も走っており、商売をする側にとっては、旅人が行き交う絶好の場所である。であるから、七日市場が、「⑩」の地に存在したのではないかと考える。定期市が行なわれたのだろう。

下宿遺跡は、伝承では「⑫」に比定されている。安永6年の膽澤郡下膽澤下衣川村風土記御用書出の「古宿」と考えられ、「七日市場」と同様に、往古に駅場があったと記されている[註 33]史料 21。

明治初年の胆沢郡下衣川区地籍図を見ると、ちょうど「②」・「⑬」・「⑭」の南側に陸路が設けられている(図 g)。これら3つを行き来するためには不可欠な陸路である。しかし、その道を、接待館遺跡まで延長するわけにはいかない。というのも、接待館遺跡は、二重の堀と背後の衣川によって区画されており、陣幕を巡らした特別な空間であると考えられるからだ。

「②」・「⑬」・「⑭」に接する道と奥大道とを接続させる道路は、接待館遺跡を迂回し、「⑫」の側を通るように設置されるのが妥当だと思う。そして、七日市場で商売をした人々が、「瀬原河原宿」の他に宿泊する場所として、「⑫」に下宿も設置されたと推測する。

三つ目は、衣河が中尊寺領としても機能していたということである。

『中尊寺文書』を見ると、瀬原村にあり且つ中尊寺運営に用いられたものが多数存在する。第一章でも述べたが、中尊寺という大寺院を支えるためには、学侶が日常生活を送る場所や必要な物資に報酬、伽藍の修理費、法会を行なうための物資が必要である。

鎌倉期までに限定して、次頁の表1に示すこととする[註 34]。

表：中尊寺領のうち瀬原村にあると考えられるもの

年号	瀬原村にあると記されているもの	出典
天治 3(1126).3.25	御堂出入料田 7 段 屋敷 1 所 燈明料屋敷 2 所のうちの 1 所	藤原清衡中尊寺經藏別當議 状案[史料 22]
保延 6(1141).3.28	免田 7 段 燈明料畠 1 所	中尊寺經藏別當蓮光議状案 [史料 23]
弘長元(1261).9.25	御經藏文殊講油畠	平泉兩寺（中尊寺・毛越寺） 権別當権律師某下文[史料 24]
建治 2(1276).2.24	瀬原畠 5 町	平泉兩寺（中尊寺・毛越寺） 別當法印某下文[史料 25]
弘安 3(1280).5.25	免田・屋敷等	中尊寺經藏別當永栄議状 [史料 26]
弘安 7(1286).3.11	御經藏出入免田 7 段（畠あり） 大堂修正田 6 段（畠あり） 愛染明王修正田 4 段（畠あり）	某袖判補任下知状案 [史料 27]
正応 3(1290).4.5	出入免田 7 段 燈油畠 3 所のうち 1 所	中尊寺經藏別當朝賢議状 [史料 28]
正安 2(1300)閏 7.18	大日堂免畠 1 所	免畠相博状[史料 29]
延慶 2(1309)7.2	中尊寺大長寿院免田 1 町 1 段 燈油畠	中尊寺大長寿院住持職補任 状[史料 30]
正和 2(1313).12.18	中尊寺御經藏免田 7 段のうち 4 段	中尊寺經藏免田畠坊地議状 [史料 31]
正和 2(1313).12.18	中尊寺大長寿院免田 1 町 1 段 燈油畠	中尊寺大長寿院免田畠坊地 議状案[史料 32]
正和 3(1314).12.25	燈油畠 出入免田	中尊寺經藏別當行盛議状 [史料 33]
元享 3(1323).12.20	瀬原うち二田 3 段	頼口賣券[史料 34]
嘉暦 3(1328).6.15	きたまたのた 代一貫文 せわらのそりはたけ 代九百文	中尊寺經藏別當行盛議状 [史料 35]

表をみると、經藏など、中尊寺伽藍内にある施設の修理費や、学侶が日常生活を送るための食事や報酬、仏事を行なう際に火を灯すための燈油など、学侶だけでは賄うことのできない物資が、瀬原村で生産されたことが窺える。表中にある「愛染明王」とは、三目六臂で種々の武器を手にした姿で、愛欲などの迷いがそのまま悟りにつながることを示し、

忿怒暴悪の外見だが、愛をもって衆生を解脱させる神のことである。

中尊寺大長寿院免田が1町1段もあり、蠟燭の灯りを灯す油の原料を育てる畠や修理費に充てる田があるなど、田畠が広範囲にあったと想像される。中尊寺領の田畠の所在は、六日市場遺跡にて発見された「東を画する堀」までは行かず、下宿の北から長者ヶ原廃寺周辺にかけて広がっていたと思われる。

また、寺領を管理するために、中尊寺別当の里坊も設置されていた。里坊とは、第一章でも前述した通り、俗的活動や経済的活動を行なう空間に建つ僧侶の屋敷をいう。その候補地として、「⑩」の「池辺坊屋敷」が挙げられる。表1中、元享3(1323)年12月20日「頼口賣券」にも「いけのはたのはうち(池の端の坊地)」と記されており、瀬原村にあると考えられる[史料34]。また、明治晩年の記録ではあるが、「衣川誌」によると、関山中尊寺の属寺として往古から所在したという。衣川村の東南寄りの段丘南縁の、唐金・石畑・池田などに僧坊跡があったと伝えられ、年代不明ではあるが、墓碑などが多く残されていたという[註35]。

寺領の民衆に田畠を耕作させ、その収穫物を随時中尊寺に送っていたと考えられる。

今まで述べたことを総括すると、衣河は、西側には、藤原基成や源義経という政治上の重要人物が住む屋敷が構えられ、東側には、「産業は亦た海陸を兼ねる」役割を果たす市場・宿・川湊の聳える一大商業拠点が構えられ、中尊寺領の田畠も広がる、副都心としての機能を果たしたといえるだろう。

第四節 祇園

つづいて、平泉の南に位置する「祇園」である。

ここからは、「平泉・祇園復原図 (1/5000)」(図 H) の「祇園」部分を基に述べる。

祇園に関する記録は、寺塔已下注文「一 鎮守事」に「南方鎮守 祇園社 王子諸社」とあるのみだ。しかし、現在でもこの 2 つは残っており、祇園社に至っては、王城鎮守二十二社の一つで、中世に京都下京を中心にして商家の信仰を集めた、商業の神様として崇められている。付近には、「三日町」という地名も残されており、祇園において定期市が催されていたことが推測される。祇園でも商業活動が行なわれたようだ。

ここで、これまでの発掘調査の結果を見てみよう。

まず、祇園Ⅰ遺跡では、12 世紀中頃～12 世紀第 3 四半期の 4 間×5 間四面庇建物や、12 世紀後半の三間四面庇建物と考えられる掘立柱建物、門跡・便所遺構・掘立柱建物に関する埋納遺構などが出土している。遺物は、大型と小型の手づくねかわらけ・12 世紀の押印のある渥美産甕・青白磁皿などがある[註 36]。

祇園Ⅱ遺跡では、12 世紀の 5 間×4 間の四面庇建物や中世の井戸が出土している。遺物では、手づくねかわらけや、高台付きかわらけが発見されている[註 37]。

祇園Ⅰ・Ⅱ遺跡は、南方鎮守の祇園社に隣接するように存在する。都市平泉の鎮守社は秀衡時代に勧請されたと考えられているため、その頃に整備されたと思われる。四面庇建物という格式高い建物の存在から、祇園社を管理するための宗教施設、あるいは神官が生活する施設があったと考えられる。神官が居住して行事などを行ない、日常生活も送っていたのかもしれない。

祇園社と王子諸社は、ほぼ同緯度に立地している。祇園社から東に延長した道に接するように王子諸社も存在し、さらに東へ進むと、第二節でも述べた北上川旧河道の分流にぶつかる。この分流は、例えば禊など、祇園社に関係する用途もあったのかもしれない。

高玉遺跡では、12 世紀後半の東西 2 間×南北 3 間と、2 間×3 間の 2 棟の掘立柱建物や、12 世紀～12 世紀後半の大量の溝跡も検出されている。遺物では、12 世紀後半の手づくねかわらけをはじめ、12 世紀の常滑産甕・常滑産壺・常滑産鉢・渥美産甕・青白磁碗・白磁壺・白磁碗・鉄釘・坩鍋・鉄鍋が発見されている[註 38]。

高玉遺跡自体、北上河旧河道とその分流の間に位置する、小高い丘陵上にある。洪水が発生した際に被害を受けることはない。そして、国産陶器だけでなく中国産陶磁器も発見されており、且つ日常生活に関わる品々もあるということは、この場所に、祇園を管理する有力者が住んでいた可能性も考えられる。南からの交易品を運搬した人々と謁見する場も存在したのかもしれない。

三日町Ⅲ遺跡では、12 世紀の道路側溝と思われる溝跡が発見されている。遺物では、12

世紀の手づくねかわらけ・ロクロかわらけ、遺構外ではあるが常滑産甕・渥美産甕も出土している[註 39]。

祇園では、至るところで国産陶器や中国産陶磁器が発見されている。序章でも述べたが、南からもたらされる交易品は、常滑・渥美産陶器、「白磁器」・「青磁器」・「青白磁器」・「宋版一切経」などの南宋の品々、「犀角」・「象牙笛」・「水牛角」・「蜀江錦直垂」、「紫檀」・「赤木」など、シルクロードを介した品物である。

これらの品々は、第二節で述べたとおり、祇園Ⅰ及びⅡ遺跡と高玉遺跡の間にある北上川旧河道の分流と、三日町にある太田川旧河道との合流地点にある川湊に集積し、三日町付近にて荷揚げが行なわれたと思われる。そして、三日町付近で、定期市として商業活動も行なわれたことが推測される。

川湊にて荷揚げされた品物は、祇園だけでなく、北部の平泉や衣川にも運搬されたことだろう。

では、祇園と平泉を接続する陸路は無かったのだろうか。

実際の跡は残っていないが、八重樫忠郎氏は、南からのルートは現国道 4 号線が、おおむね踏襲するのではないかと述べている。具体的には、三日町Ⅲ遺跡第 2 次調査区から 4 号線へ向かう波板状凹凸を伴う 12 世紀後半の道跡、高田遺跡第 3 次調査区の 12 世紀の可能性もある道跡、高田遺跡第 2 次調査区から 4 号線に平行する中世の区画溝跡を検出していることを理由に、4 号線が中世まで遡ることが出来るという。そして、源頼朝が、奥州合戦の帰路にこのルートを使用しなかったため、規模が小さい可能性も述べている[註 40]。

更に、途中にある太田川を渡りやすい場所として、「八花形」と呼ばれる半島状に張り出した丘陵の端部付近に接続した可能性も指摘している。八花形まで到達した後は、隆衡館の西側を尾根に沿って上り、毛越寺中の奥大道へ合流するものと思われる。八花形の麓の標高は 23m あり、毛越寺や国衡館遺跡の地点の標高が 27m であることを考えると、尾根を緩やかに登っていったほうが往来しやすい。

以上を踏まえると、祇園と平泉とを接続する陸路は、ほぼ 4 号線に沿って北上し、八花形まで来た後、隆衡館の西側を上り、奥大道へと通じたと推測する(図 H)。このルートをもって、三日町付近の川湊より荷揚げされた交易品が、平泉や衣川まで運搬されたのだろう。

今までを総括すると、祇園は、都市平泉の南に聳え、南からの交易品が最初にもたらされる一大商業都市として機能していたのである。

第五節 白鳥館遺跡

都市平泉の最北端に位置するのが「白鳥館遺跡」である。

ここからは、「白鳥館遺跡復原図 (1/5000)」(図 a) を基に述べていく。

文治5年9月27日条には、安部頼時の子息として「白鳥八郎行任」という名がある[史料 19]。平泉舊蹟志には「白鳥館」と記され、安部貞任の弟である白鳥八郎行任の居館であった。天正年中は、岩淵伊賀守という者が住んでいたらしい[註 41][史料 36]。安永6年の膽澤郡下膽澤郡白鳥村風土記御用書出にも同じ記述がなされている[註 42][史料 37]。

実際、その人物の拠点であったかどうかは分からないが、白鳥館遺跡では、10世紀～戦国期にかけての遺構や遺物が多数発見されている。遺跡自体は、安部氏の時代を含め、何かしらの重要な拠点として捉えられて機能したことが推測される。

12世紀後半の遺構は、水田部分から発見されている(図 h)。

8~10次調査では、12世紀後半の掘立柱建物群・井戸6基・鍛冶遺構・粘土充填遺構・かわらけ窯6基が発見されている。現時点で、これほどの量のかわらけ窯跡は、他の平泉遺跡群からは発見されていない[註 43]。

また、11~12次調査では、調査区の西側に区画溝、東側に大量の井戸や掘立柱建物跡、その間に道路状遺構が発見されている。区画溝は、ちょうど8~10次調査区と11~12次調査区を区切るように存在する。及川真紀氏によれば、12次調査区の柱穴から、粗雑ではあるが、掘立柱建物が復原できるという[註 44]。

以上より、白鳥館遺跡には、手工業を行なうための空間と、かわらけ職人らが住むための居住空間が存在し、職人が住み込みながら働いていた光景が考えられる(図 a)。

道路状遺構は、第二節で前述した、入り江①と②の両方に接続したと推測される。

そして、①と②をつなぐように、運河も流れていたとも考える。

遺物では、12世紀の手づくねかわらけが発見されている。手づくねかわらけは、接待館遺跡の堀で大量に廃棄されたように、宴会で頻繁に消費されるものだ。

序章にて、「手づくねかわらけ」が京都の技術者の指導によって導入されたと述べたが、それ以降も都市平泉内において、常にかわらけを生産し続ける場所は必要になってくる。ちなみに、柳之御所遺跡の中にも手工業遺構は発見されているが、それは、柳之御所の中だけで使用する程度でしかないであろう。

しかし、手工業生産を行う場を、人々の密集するような都市中心部に設置するわけにはいかない。手工業生産は、作業の過程で必ず火を使う。すると、廃棄ガスが噴出する場合や、万が一火災が発生する場合も考えられ、大多数の都市民に危害を与えることになるからだ。八重樫忠郎氏も、かつて都市中心部に存在した花立窯跡について、燃料の確保のた

め、重要施設である金鶏山の経塚や、花立廃寺の営まれていない時期に成立したと述べている[註 45]。人々への危険を回避し、且つ常に生産することの出来る場として、白鳥館遺跡が機能したのではないだろうか。

今までを総括すると、白鳥館遺跡の都市機能は、蝦夷地からの交易品を川湊と運河を経て衣河へ運ぶことと、かわらけといった手工業生産を一手に担い、その生産品を運搬するところにあつたと考える。

第六節 本町遺跡

都市平泉の東端に位置するのが本町遺跡である。

ここからは、「本町遺跡復原図 (1/5000)」(図 d) を基に述べていく。

本町遺跡は、12 世紀後半～13 世紀の大量の墓跡が、溝に囲まれた状態で発見されている。そのうち 1 号墓壇は、12 世紀後半である建物跡によって覆われており、中尊寺方向を向いている。大量に墓跡が発見された例は、他の遺跡から見つかっていないため、都市平泉における墳墓拠点であつたことが考えられる。

しかし、墳墓拠点であるだけではない。

10 世紀～11 世紀と考えられる方形居館跡も検出されており、さらに、そこから 12 世紀～13 世紀の中国産陶磁器(白磁四耳壺)も発見されている。八重樫忠郎氏のいう「平泉セット」が存在することが窺える。さらに、12 世紀の渥美産の四耳壺も発見されており、奥州藤原氏代にも生活が営まれていたことが、明らかにされている[註 46]。この付近で、何かしらの宴会が行なわれた可能性が考えられる。

調査区の用水路部分からは、堀跡や道路状遺構・柱穴多数も発見されている(図 d)。

第一節で前述したとおり、本町遺跡は、砂金と魚介類の産地である気仙郡と気仙街道でつながっている。用水路部分から発見された道路状遺構は、その位置関係から、気仙街道の一部ではないかと推測する。そして、その東側に柱穴が多数あることから、掘立柱建物が建っていたことも想像される。

気仙郡の人々が、朝早くに気仙郡を出て、約 50km 先の本町遺跡に夕方に辿り着いたと考えると、品物を届けた直後に引き返せば、真っ暗な山道を帰らなければならなくなり、大変危険である。だから、砂金および魚介類を運んできた人々のために、宿泊施設や市場のような施設は存在したはずである。用水路部分の東側に広がる掘立柱建物が、それに当たったのではないかと思う。

今までを総括すると、本町遺跡は墳墓拠点であるとともに、古代から集落も存在し、砂金や魚介類がもたらされる場所として、砂金を運搬した人々との宴会も行われ、市場と宿泊施設が整備されたと考えられる。

墓所と市場と河原の存在。本町遺跡には、網野善彦のいう「河原の世界」が広がっていたことであろう[註 47]。

[註 1] 「境界都市平泉と北奥世界」 齊藤利男、『東北古代史の研究』(1987 高橋富雄 吉川弘文館)

[註 2] 『いわて旅街道』(2003 村田源一朗 岩手日報社)

[註 3] 「都市衣川・平泉と北方世界」 齊藤利男、『平泉・衣川と京・福原』(2007 入間田宣夫 高志書院)

[註 4] 『サバ街道と都の文化 ～京は遠ても十八里～』(1996 福井県若狭歴史民俗資料館)

[註 5] 「境界都市平泉と北奥世界」 齊藤利男、『東北古代史の研究』(1987 高橋富雄 吉川弘文館)

[註 6] 『奥州藤原三代』(2011 齊藤利男 山川出版社)

[註 7] 『平泉町史』(1985 平泉町史編纂委員会 平泉町)

[註 8] 「北日本における古代末期の交易ルート」 鈴木琢也、『古代中世の蝦夷世界』(2011 榎森進・熊谷公男 高志書院)

[註 9] 註 10 に同上。

[註 10] 「安部・清原・奥州藤原氏と北の辺境」 齊藤利男、『古代中世の蝦夷世界』(2011 榎森進・熊谷公男 高志書院)

[註 11] 註 12 と同上。

[註 12] 「東アジアの平泉」 八重樫忠郎、『アジア遊学 102号』特集：東アジアの平泉(2007 勉誠出版)

[註 13] 『奥州藤原三代』(2011 齊藤利男 山川出版社)

[註 14] 川湊の存在に関しては、齊藤利男氏や八重樫忠郎氏、小野正敏氏、瀬川拓郎氏も強調している。

[註 15] 『多賀城の古代東北』(1985 東北歴史資料館・宮城県多賀城跡調査研究所 宮城県文化財保護協会)

『日本の美術 多賀城跡』(1984 桑原滋郎 至文堂)

『図説 宮城県の歴史』(1988 渡辺信夫 河出書房新社)

[註 16] 『利根川と淀川』(1988 小出博 中央公論社)

[註 17] 『地域の熱き願い』(一関市北上川治水地権者会ら)

[註 18] 「都市衣川・平泉と北方世界」 齊藤利男、『平泉・衣川と京・福原』(2007 入間田宣

夫 高志書院)

『寝殿造の研究』(1987 太田静六 吉川弘文館)

[註 19] 『玉葉』の文治3年9月29日条より。

[註 20] 『吾妻鏡』建久元年6月23日条より。

[註 21] 『衣の関道遺跡第1,2次発掘調査報告書』(2011年 財団法人岩手県文化振興埋蔵文化財センター 国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所)

[註 22] 『衣川流域における古代末期遺跡調査報告書 長者ヶ原廃寺跡第3次・第5次・第7次』(2007年 岩手県立博物館 岩手県文化振興事業団)

『長者ヶ原廃寺跡発掘調査報告書第14次調査』(2012年 奥州市世界遺産登録推進室)

[註 23] 『衣川流域における古代末期遺跡調査報告書 長者ヶ原廃寺跡第3次・第5次・第7次』(2007年 岩手県立博物館 岩手県文化振興事業団)

[註 24] 『六日市場・細田・接待館遺跡発掘調査報告書』(2008年 財団法人岩手県文化振興埋蔵文化財センター)

[註 25] 発掘調査報告書では「細田遺跡」とされているが、「細田」という字は遺跡と違う場所にある。遺跡自体は「六日市場」という字に所在するため、「六日市場遺跡」と「細田遺跡」を含めて、「六日市場遺跡」と称すべきだという考えに至っている。この論文では、便宜上「細田遺跡」という名称を用いて執筆した。

[註 26] 註 24 と同上。

[註 27] 註 24 と同上。

[註 28] 「安永風土記」『宮城県史 28』に記されている。

しかし、岡陽一郎氏によると、「セッタヤ」とは、崖を意味するという。

[註 29] 「都市衣川・平泉と北方世界」斉藤利男、『平泉・衣川と京・福原』(2007 入間田宣夫 高志書院)

[註 30] 「市・宿・町」笹本正治、『岩波講座 日本通史第9巻 中世3』(1994 安江良介 精興社)

[註 31] 『六日市場・細田・接待館遺跡発掘調査報告書』(2008年 財団法人岩手県文化振興埋蔵文化財センター)

[註 32] 註 28 と同上。

[註 33] 註 30 と同上。

[註 34] 『平泉町史』(1985 平泉町史編纂委員会 平泉町)

[註 35] 『下衣川地区遺跡詳細分布調査報告書』(1988 衣川村教育委員会)

[註 36] 『第47集 平泉遺跡群発掘調査報告書』(1996 平泉町教育委員会)

[註 37] 『第118集 平泉遺跡群発掘調査報告書』(2012 平泉町教育委員会)

[註 38] 『高玉遺跡第3次発掘調査報告書』(2007 平泉町教育委員会)

[註 39] 『第85集 平泉遺跡群発掘調査報告書』(2005 平泉町教育委員会)

- [註 40] 「平泉への道、平泉の道」八重樫忠郎、『中世のみちと物流』（1999 藤原良章・村井章介 山川出版社）
- [註 41] 「平泉舊蹟志」『仙台叢書』1 所収。
- [註 42] 註 28 と同上。
- [註 43] 『国指定遺跡 白鳥館遺跡発掘調査報告書 第 8 次』（2012 奥州市世界遺産登録推進室）
『国指定遺跡 白鳥館遺跡発掘調査報告書 第 9,10 次』（2012 奥州市世界遺産登録推進室）
- [註 44] 『白鳥館遺跡第 11 次発掘調査の概要』（2012 奥州市世界遺産登録推進室）
- [註 45] 「平泉藤原氏の陶器窯」八重樫忠郎、『兵たちの時代Ⅱ 兵たちの生活文化』（2010 入間田宣夫 高志書院）
- [註 46] 『第 410 集 本町Ⅱ遺跡 第 2 次発掘調査報告書』（2003 財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化センター）
- [註 47] 「都市のできる場 ～中州・河原・浜～」網野善彦、『増補 無縁・苦界・楽 ～日本中世の自由と平和～』（1996 網野善彦 平凡社）

終章 都市平泉の全体の特徴

第二章では、交通体系という視点から、衣河・祇園・白鳥館遺跡・本町遺跡の景観と都市機能を論じてきた。しかし、この視点のみでは、どうしても都市機能を考察することのできない地域も存在する。宿遺跡と月館遺跡である。これらは、どのような都市機能を果たしたのだろうか。

終章では、二つの都市機能を若干考察するとともに、これらを全て含めた都市空間こそが都市平泉であることを、まとめにかえて述べていきたい。

第一節 宿遺跡と月館遺跡

まず、宿遺跡について。

宿遺跡は、都市平泉の最南端に位置する(図D)。奥州藤原氏代の、この場所に関する記録はない。「宿」という名称から、交通の要衝地に設置され、外からやって来た人々への宿泊施設が建てられていたと想定される。

発掘調査では、1次調査において、12世紀後半の掘立柱建物跡や門跡が重複した状態で発見されている。12世紀後半だけでも、四度の建て替えがなされたそう。更に、溝跡に加え、かわらけ埋没土坑も、かわらけが伏せられた状態・伏せてある状態・上を向いた状態と様々な状態で発見され、土地を開発するための地鎮めの儀式の跡と想定されている。遺物では、12世紀後半の大型の手づくねかわらけ・小型手づくねかわらけが多数発見されている[註1]。

4次調査では、12世紀の身舎3間×2間の四面庇建物が発見されている[註2]。平泉及び祇園から離れているのに、このような格式高い建物が存在するとは驚きである。

笹本正治氏は、「宿」について、出入口に土塁などの防禦施設が設けられた事例もあると述べている。実際の攻撃に備えることと、宿の境界のシンボルとしての意味を持たせるためであった[註3]。宿遺跡の、門を備えた掘立柱建物群を囲む溝も、境界のシンボルとして設置されたと考えられる。1次調査にて、四度の建て替えがなされたと述べたが、うち第II期では、遺跡東側に南北方向に門跡が設置されていた。そこを出入り口と考えると、門跡の東側に、南北方向に延びるように陸路が通っていた可能性が高い。

更に、八重樫忠郎氏によると、宿遺跡の付近には、「経塚」も存在したという[註4]。経塚とは、経典を納めた経筒を容器に入れ、土坑ないし小石室に埋納された場をいう。実際は盛り土や石塔を伴う。経典の埋納は、『如法経』の供養の方法であり、経典には、「法華三部経」や「浄土三部経」という、後に「法華経」をさすものが多かった。埋納することによって、経に説く利益にあずかることや法滅に備えることが願望された。

ここで、都市平泉の経塚に関して、八重樫忠郎氏は、奥州藤原氏代に何らかの目印にしたり、霊の力でもって土地を守護する目的で、都市周縁部の要地や交通路沿いに多く造営されたと主張する。例えば、金鷄山経塚や奥大道沿いにある鏡山・要害地区の経塚山などがある[註 5]。確かに、都市平泉の経塚の分布を見ると、奥大道沿いや宗教施設付近に存在している(図 E)。経塚の地点から経の力が発揮され、その付近にある地域を守護していたのだろう。宿遺跡付近の経塚も、そこを法華経の力で守護するために、営まれたのだろう。

宿遺跡は大佐地区にある。発掘調査報告書によると、遺跡調査地の東側近接地には、元禄 9 (1696) 年の書上の写しに出てくる「寄水観音」があったという。安永 4 (1175) 年の磐井郡西磐井平泉村毛越寺書出にも、「宿」に「寄水観音堂」があったと記されている[註 6]史料 21。北上川の洪水の際、観音堂或いは仏像が流れ着いた所であるらしい。更に、近年までは毛越寺の支院である宝積院が管理していたという。観音堂或いは宝積院が 12 世紀代まで遡ることが出来れば、宿遺跡もそれと関連していたと考えられる[註 7]。

12 世紀の宿遺跡の管理者が毛越寺の支院であれば、経塚も、中尊寺や毛越寺の影響を受けて、宿遺跡の設置に合わせて営まれたと思われる。

今までを踏まえると、宿遺跡は、最も南に立地した宗教施設として付近の地域を守護し、中尊寺や毛越寺の思想を浸透させたと思われる。更に、外部から来た人々への宿泊施設としても開放していたとも考えられる。

次に月館遺跡。

月館遺跡は、都市平泉の北東端に位置し(図 D)、12 世紀頃の石造作品が数多く残されている。

大師堂と呼ばれる小高い一角には、「月館大師石像」が安置されている。挟川真一氏によると、基壇や台座も含めて、全てが地元の凝灰岩を用いていることから、製作年代は平安時代後期に遡り、在地の工人によって作られたという。石造の周辺には、若干狭いが平坦部分も確認され、覆堂の存在も想定している[註 8]。

また、月館大師堂前には宝塔もある。これも平安時代後期の製作とされ、納入する孔もあることから、随時納経を受け入れられる納経所の役割を果たしたと考えられている。月館遺跡の西側には、「大仏山」とよばれる経塚山が存在するという。

この遺跡を現地調査すると、遺跡全体が、中尊寺のある関山をはっきりと見渡せる位置に立地していた。更に、遺跡の西側には田畠が段違いに設けられていた。中世まで遡ることが出来れば、そこに里坊が立ち並んでいても決して無理な話ではない。ちなみに、遺跡内にある二月堂は、二月会が行なわれたことに由来するという[註 9]。

板碑も多く見受けられた。挟川真一氏によると、平泉の板碑は、13 世紀後半から 14 世紀前半に造営されたと述べ、その分布地域は、中尊寺境内と毛越寺周辺と月館の 3 ヶ所のみだという。宗教活動を行なうことが出来た集団の存在を裏付けるものとし、月館大師堂は、中尊寺や毛越寺と密接な関係にあったと推測している[註 10]。

板碑だけでなく、平安時代後期の造営年代とされる石像も多数発見されていることから、月館大師堂は、奥州藤原氏が生きていた頃から中尊寺や毛越寺と関係を持っていたことは十分考えられる。

今までを踏まえると、月館遺跡は、都市平泉の北に聳える宗教施設として、その付近の地域を守護し、中尊寺や毛越寺の思想を浸透させる機能をもったと思われる。この周辺に住んでいる人々は、中尊寺を訪れられない分、関山からの風景を堪能し、少しでもその救いを得ようとしたのだろうか。

第二節 都市平泉の全体の特徴

不十分な点が多々あるが、宿遺跡と月館遺跡の考察を終える。

序章第一節にて、現在では、都市平泉の範囲が、北は衣河・南は祇園まで広がる説が定着していると述べた。しかし、都市平泉が都市として成立するためには、平泉・衣河・祇園と、白鳥館遺跡・本町遺跡・月館遺跡・宿遺跡が密接な関係を持たないと難しい。ここからは、まとめに変えて、これら全ての地域を含めた都市平泉全体の特徴を考察していく。

平泉は、第一章のとおり、政治においても宗教においても、都市平泉の「原点」であり「中核」となる場所であった。政治上では、初代清衡による中尊寺金色堂を見舞うように、家臣との合意形成を行なうための東建物と、外から来た役人との宴会儀礼を行なう西建物を備えた「平泉館」が設置された。そこは、秀衡の鎮守府將軍補任を契機に、周壕を大規模に改造するなど、政庁としての重きが増すこととなった。平泉の要所には、秀衡の子息たちが屋敷を構えて交通路を抑え、往来する人々を監視した。

宗教上では、中尊寺は、比叡山と関わりを深めることで、天台宗の根本経典『法華経』の世界を具現化した伽藍を設置した。その中に奥大道を通し、南は白河関・北は青森県青森市油川にある外ヶ浜まで、あらゆる階層の人々へ平等に救いが施されるように、笠卒塔婆が設置された。中尊寺は、法華経を陸奥国全体に浸透させる中心であった。

毛越寺は、中尊寺を補完するように、薬師如来を本尊とした伽藍が設置された。中尊寺が北から往来する人々へ意識を向けたのに対し、京都や東国、すなわち「南」から往来する人々へ向けて、平泉への入り口として強烈な印象を与えた。

無量光院は、盂蘭盆会とその翌日の清衡の命日に、夕日が金鶏山と本堂阿弥陀堂を一直線に照らすように設計された。先祖の思いを常に意識し引き継ぐとともに、極楽浄土を体現させたものであった。中島も設置され、秀衡と民衆の立場の差はあるものの、極楽浄土の世界を実感することが出来た。

鎮守社も、洛中洛外にある本社が平泉にも勧請された。しかし、「伊勢」・「八幡」・「加茂」・「春日」という、国家の思考が詰まった鎮守は勧請されなかった。寺院や都市形成にあた

って独自に築き上げた繋がりを活かし、都市平泉の理想に即した鎮守社が、「平泉の基準」で判断され、勧請された。その鎮守社によって、都市平泉の商売活動や日常生活、付近の地域の守護がなされた。

しかし、中尊寺の天台系山地伽藍を建立するためには、それを可能にする人々の往来、宋版一切経の獲得、運営に必要な費用の獲得が不可欠である。

また、宴会儀礼を行なうためには、京都と同等かそれ以上の質の良い食事であり、地元の食材を振舞うことも必要だ。平泉セットと呼ばれる「手づくねかわらけ」・「白磁四耳壺」・「常滑三筋壺」・「渥美刻画文壺」の確保も不可欠だ。日常生活を送るための食材や物資の獲得も当然必要である。

そして、中央から干渉されないためには、中央政府に珍重される北方の特産品を確実に貢納する必要がある。特に日宋貿易では、日本からの輸出品に「金」が含まれている。貿易を継続するためには、定期的に「金」を獲得して送り届けなければならない。

これら全ての交易品の獲得は、平泉で賄うことが出来るはずがない。

交易品の生産地と平泉とを結び、安全な交易を行ない続けるために、衣河・祇園・白鳥館遺跡・本町遺跡は存在した。

まず、北と南からやって来る交易品の集積場所となったのが、平泉の北に位置する「衣河」と、南に位置する「祇園」であった。

「衣河」は、「六日市場」・「七日市場」という商業施設、「瀬原河原宿」・「下宿」などの宿泊施設が立ち並び、「産業は亦た海陸を兼」ねる場所として、白鳥館遺跡と本町遺跡からもたらされた交易品を集積する川湊も整備された。中尊寺領として田畠も耕作されていた。

更に、中央から配流された源義経や藤原基成を匿い、中央へは「夷敵の地に配流された」と見せかけ、都市平泉では、源義経を「大將軍」として政治の中核を担わせるなど、中央へ良い顔をしつつ独自の政治形態を追求する、副都心ともいえる機能も持っていた。

「祇園」は、商業の神様「祇園社」のもとで商業活動が展開された。国産・東アジアからやって来る交易品は、全て祇園に集積される。祇園Ⅰ及びⅡ遺跡と高玉遺跡の間にある北上川旧河道の分流と太田川旧河道の合流地点が川湊として栄え、その付近の「三日町」にて定期市が行なわれた。

衣河と祇園の商業地区が成立するためには、そこまで安全に運搬するための交通路が整った、都市への入り口も必要である。それが、「白鳥館遺跡」・「本町遺跡」である。

「白鳥館遺跡」は、北海道から新田(1)遺跡へ来て北上川を経てもたらされる、北方からの交易品を、衣河へ運搬するための川湊と運河が整備された。それだけでなく、都市中心部への危害を避けるため、宴会に不可欠なかわらけなどの手工業生産を一手に担い、それらを衣河まで運搬する機能も果たしていた。

「本町遺跡」は、都市平泉における一大墳墓拠点であった。それだけでなく、川湊も整備され、気仙郡で生産された砂金および魚介類を運搬するための気仙街道とも接続し、一日かけて荷物を運搬した人々と謁見し、宴会を催し、宿泊施設や市場も揃っていた。

この四つの川湊を備えた地域があったからこそ、生産地と平泉との間において、安全な交易をすることが出来たといえる。しかし、序章第二節で述べた「府中」と同様、四つの地域を囲むように宗教施設を設置する必要がある。それが、「宿遺跡」・「月館遺跡」である。

「宿遺跡」には、溝に囲まれた、門の伴う掘立柱建物群や四面庇建物がある。付近には経塚も存在し、毛越寺支院の宝積院による管理もあったことから、中尊寺や毛越寺の思想を浸透させる宗教施設として、付近の地域を守護し、外から往来した人々への宿泊施設としても開放された場所であった。

「月館遺跡」は、平安後期の石造が多く残され、奥州藤原氏代から中尊寺や毛越寺との密接な関係を持ったと思われる。近くの大仏山には経塚も営まれ、ここもまた中尊寺や毛越寺の思想を浸透させるための宗教拠点として、付近の地域を守護したと思われる。

以上、6つの地域の特徴をまとめたが、改めて都市平泉全体を見ると、白鳥館遺跡と本町遺跡の交通機能が衣河の商業機能を支え、白鳥館遺跡の手工業生産や本町遺跡の墳墓拠点・衣河と祇園の交通及び商業機能が、平泉の政治・宗教機能を支えていた。そして、都市平泉の境界には宿遺跡と月館遺跡が設置され、「府中」のように、内部空間が宗教的に守護された。

白鳥館遺跡・本町遺跡・月館遺跡・宿遺跡は、地図上ではかなり距離はあるが、これらによる「支え」がなければ、平泉・衣河・祇園は機能せず、東北地方に聳える平和な「複合都市」にはなれなかったのである。そういった意味でも、今までの小規模な復原案とは異なる、「大平泉」ともいべき都市空間が存在したのではないだろうか。

[註1] 『宿遺跡第1次発掘調査報告書』(1994年 平泉町教育委員会)

[註2] 『第77集 平泉遺跡群発掘調査概報』(2002 平泉町教育委員会)

[註3] 「市・宿・町」 笹本正治、『岩波講座 日本通史第9巻 中世3』(1994 安江良介 精興社)

[註4] 齊藤利男氏のご教示による。

[註5] 「平泉における寺院」 八重樫忠郎、『中世都市と寺院』(2005 吉井敏幸・百瀬正恒編 高志書院)

「中世都市周縁部の歴史を探る ～毛越地区の踏査から その3～」 岡陽一郎、『平泉文化研究年報 第7号』(2007 岩手県教育委員会)

[註 6] 「安永風土記」『宮城県史 28』より

[註 7] 『宿遺跡第 1 次発掘調査報告書』(1994 平泉町教育委員会)

[註 8] 「平泉の石造文化」挟川真一、『兵たちの時代Ⅱ 兵たちの生活文化』(2010 入間田宣夫 高志書院)

[註 9] 現地調査を行なった際、岡陽一郎氏も斉藤利男氏も強調している。

[註 10] 「平泉の石造文化」挟川真一、『兵たちの時代Ⅱ 兵たちの生活文化』(2010 入間田宣夫 高志書院)

おわりに

不十分な点が多々あったが、以上で、筆者の主張は終了する。

執筆する中で見出した今後の課題は、以下の三点である。

一つ目は、宗教という観点から、都市平泉を捉え直すことである。今回は、「交易」という観点から論じたが、中尊寺・毛越寺・無量光院・鎮守社・宿遺跡・月館遺跡といった宗教施設については、どの位置に所在したかという景観論に留まった。より宗教上の意味を捉え直せば、新たな都市機能を導き出せるだろう。そのためにも、宗教論も深めていきたい。

二つ目は、都市平泉に生きた人々と生活の営みを、より深く考察することだ。序章と各章にて職人や人々の営みを考察したが、まだ不十分である。武士団・職人集団・寺社の組織や各々の営みを深く考察すれば、より広い視野から、具体的に都市機能を描くことが出来るだろう。様々な事例を調べ、筆者自身の今後の人生経験も交えて考えていきたい。

三つ目は、奥州藤原氏の政治史と関連させて、都市平泉の変遷を捉えることだ。第一章第一節にて、秀衡三男の「忠衡の家」を、戸河内村の「泉ヶ城」に比定した。しかし、嫡男国衡が「西木戸太郎」、四男隆衡が「本吉冠者」として重要視されたのに対し、忠衡は「泉三郎」と、あまり対したことのない位置づけにある。平泉政権の仕組みや中央の情勢との関わりを踏まえて考察し直せば、都市平泉の変遷や意義が明確になるかもしれない。現段階で政治史を的確に捉えるのは無理だが、今後生きていくなかで積み上げた経験を基に、地道に考察したい。

この修士論文は、多くの人々の支えなしでは描くことが出来なかった。

執筆の過程で御指導いただいた、斉藤利男氏・小瑤史朗氏・篠塚明彦氏・澤佳成氏。

調査の際に御教示いただいた、岡陽一郎氏・及川真紀氏・八重樫忠郎氏。

東北史学会報告にて叱咤激励して下さった、柳原敏昭氏・七海雅人氏・菅野成寛氏。

この全ての方々に感謝を申し上げる。この繋がりは、生涯大切にしたい。

そして、今後は岩手県の中学校教師として、

「自らも研究を続けつつ、都市平泉の意義や魅力を、次の世代に伝え続けていく」

「もっと知りたいと思い、夢中になって調べ続ける子ども達を育てていく」

という決意を表明し、論文を締めくくりたい。

史料編

- 史料 1: 『玉葉』文治 4 (1188) 年正月 9 日条 . . . /
- 史料 2: 『吾妻鏡』文治 3 (1187) 年 10 月 29 日条 . . . /
- 史料 3: 寺塔已下注文 (『吾妻鏡』文治 5 年 9 月 17 日条) . . . /
- 史料 4: 『吾妻鏡』文治 5 (1189) 年 8 月 22 日条 . . . /
- 史料 5: 安永 4 (1775) 年磐井郡西磐井戸河内村風土記御用書上、戸河内村「泉ヶ城」 . . . /
- 史料 6: 『吾妻鏡』文治 5 年 9 月 14 日条 . . . /
- 史料 7: 『吾妻鏡』文治 5 年 9 月 23 日条 . . . /
- 史料 8: 中尊寺供養願文 . . . /
- 史料 9: 安永 4 年の磐井郡西磐井平泉村毛越寺書出、「鎮守社」・「宿」 . . . /
- 史料 10: 平泉舊蹟志、「白山・日吉両社址」 . . . /
- 史料 11: 陸奥国宣 (延元 2 (1337) 年 9 月 2 日) . . . /
- 史料 12: 『吾妻鏡』文治 5 年閏 4 月 31 日条 . . . /
- 史料 13: 『吾妻鏡』文治 5 年閏 5 月 22 日条 . . . /
- 史料 14: 『吾妻鏡』文治 5 年 9 月 18 日条 . . . /
- 史料 15: 『吾妻鏡』文治 5 年 9 月 26 日条 . . . /
- 史料 16: 『吾妻鏡』文治 5 年 8 月 25 日条 . . . /
- 史料 17: 『玉葉』文治 3 年 9 月 29 日条 . . . 2
- 史料 18: 『吾妻鏡』建久元 (1190) 年 6 月 23 日条 . . . 2
- 史料 19: 『吾妻鏡』文治 5 年 9 月 27 日条 . . . 2
- 史料 20: 「關東下知状」(文永 9 (1272) 年 6 月 23 日) . . . 2
- 史料 21: 安永 6 (1777) 年膽澤郡下膽澤下衣川村風土記御用書出 . . . 2
「セッタヤ (摂待館)」、「七日市場」・「下宿」
- 史料 22: 藤原清衡中尊寺經藏別當議状案、天治 3(1126)年 3 月 25 日 . . . 2
- 史料 23: 中尊寺經藏別當蓮光議状案、保延 6(1141)年 3 月 28 日 . . . 2
- 史料 24: 平泉両寺 (中尊寺・毛越寺) 権別當権律師某下文、弘長元(1261)年 9 月 25 日 . . . 2
- 史料 25: 平泉両寺 (中尊寺・毛越寺) 別當法印某下文、建治 2(1276)年 2 月 24 日 . . . 2
- 史料 26: 中尊寺經藏別當永栄議状、弘安 3(1280)年 5 月 25 日 . . . 2
- 史料 27: 某袖判補任下知状案、弘安 7(1286)年 3 月 11 日 . . . 2
- 史料 28: 中尊寺經藏別當朝賢議状、正応 3(1290)年 4 月 5 日 . . . 2
- 史料 29: 免畠相博状、正安 2(1300)年閏 7 月 18 日 . . . 2
- 史料 30: 中尊寺大長寿院住持職補任状、延慶 2(1309)年 7 月 2 日 . . . 2
- 史料 31: 中尊寺經藏免田畠坊地議状、正和 2(1313)年 12 月 18 日 . . . 2
- 史料 32: 中尊寺大長寿院免田畠坊地議状案、正和 2(1313)年 12 月 18 日 . . . 2
- 史料 33: 中尊寺經藏別當行盛議状、正和 3(1314)年 12 月 25 日 . . . 2

史料 34: 頼口賣券、元享 3(1323)年 12 月 20 日 … 2

史料 35: 中尊寺経蔵別當行盛譲状、嘉暦 3(1328)年 6 月 15 日 … 2

史料 36: 平泉舊蹟志「白鳥館」… 2

史料 37: 安永 6 年の膽澤郡下膽澤郡白鳥村風土記御用書出、「白鳥館」… 2

参考文献

『奥州藤原史料 (東北史史料集 2)』(1959 東北大學東北文化研究會 吉川弘文館)

『平泉町史』(1985 平泉町史編纂委員会 平泉町)

『宮城県史』 27

『宮城県史』 28

『仙台叢書』 1

図版編

- (図 A) : 平泉古図 ・・・ ①
(図 B) : 斉藤氏の復原案 ・・・ ①
(図 C) : 入間田氏の復原案 ・・・ ①
(図 D) : 大平泉復原案 (1/25000) ・・・ ①
(図 E) : 都市平泉内の平泉セットと経塚の分布 ・・・ ②
(図 F) : 北方からの交易品 ・・・ ②
(図 G) : 宋版一切経 ・・・ ②
(図 H) : 平泉・祇園復原図 (1/5000) ・・・ 封筒在中
(図 I) : 六波羅団地周辺図 ・・・ ②
(図 J) : 奥州平泉旧蹟略図 ・・・ ③
(図 K) : 倉町遺跡の 12 世紀の遺構 ・・・ ②
(図 L) : 衣河から見た「二階大堂」と「一基の塔」(復元 CG) ・・・ ③
(図 M) : 毛越寺・観自在王院跡全域配置図 ・・・ ③
(図 N) : 法勝寺復原配置図 ・・・ ③
(図 O) : 無量光院配置図 ・・・ ③
(図 P) : 無量光院の池・宇治平等院の池 ・・・ ③
(図 Q) : 花立廃寺遺構配置図と花立廃寺(金峯山社)平面図 ・・・ ③
(図 R) : 御宮往日画圖附當世ノ画圖 ・・・ ③
(図 S) : 奥大道と「馬の道」 ・・・ ③
(図 T) : 明治初年における衣里小学校付近の地籍図 ・・・ ③
(図 U) : 出羽国内の中尊寺領と平泉から日本海岸への交通ルート ・・・ ③
(図 V) : 新田(1)遺跡の立地 ・・・ ③
(図 W) : 東シナ海の海流 ・・・ ③
(図 X) : 下胆沢郡大絵図 ・・・ ④
(図 Y) : 河原台帳(明治 38 年)に見る白鳥館 ・・・ ④
(図 Z) : 白鳥館遺跡の入り江 ・・・ ④
(図 a) : 白鳥館遺跡復原図 (1/5000) ・・・ ④
(図 b) : 衣河の推定川湊拠点 ・・・ ④
(図 c) : 本町遺跡の河川の合流地点 ・・・ ⑤
(図 d) : 本町遺跡復原図 (1/3000) ・・・ ⑤
(図 e) : 祇園の北上川分流 ・・・ ⑤
(図 f) : 奥州藤原氏代の衣河復原図 (1/5000) ・・・ ⑥
(図 g) : 明治初年の下衣川地区の地割と道路 ・・・ ⑦
(図 h) : 白鳥館遺跡 7~12 次調査区図 ・・・ ⑤

(図 i) : 奥州藤原氏代の産金遺跡



参考文献

- 『世界遺産 中尊寺』(2011 中尊寺)
- 『平泉 よみがえる中世都市』(1992 齊藤利男 岩波新書)
- 『都市平泉の遺産』(2003 入間田宣夫 山川出版社)
- 『奥州藤原三代』(2011 齊藤利男 山川出版社)
- 『黄金の在処と行方 ～気仙地方とその周辺の産金遺跡～』(2011 産金遺跡研究会)
- 『日本中世の首都と王権都市 ～京都・嵯峨・福原～』(2012 山田邦和 文理閣)
- 『倉町遺跡第 7,8,9,10 次発掘調査報告書』(2007 平泉町教育委員会)
- 『平泉建築文化研究』(1996 藤島亥治郎 吉川弘文館)
- 『花立 I 遺跡第 2,3,4 次・白山社遺跡第 3 次・西光寺跡第 2 次発掘調査報告書』(2004 平泉町教育委員会)
- 「境界都市平泉と北奥世界」齊藤利男、『東北古代史の研究』(1987 高橋富雄 吉川弘文館)
- 「東アジアの平泉」八重樫忠郎、『アジア遊学 102 号』特集：東アジアの平泉 (2007 勉誠出版)
- 『地域の熱き願い』(一関市北上川治水地権者会ら)
- 『第 410 集 本町 II 遺跡 第 2 次発掘調査報告書』(2003 財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化センター)
- 『史跡・柳之御所・平泉遺跡群 白鳥館遺跡保存管理計画書』(2006 奥州市総合政策部企画調整課世界遺産登録推進室)
- 『白鳥館遺跡 第 11 次調査の概要』(2012 奥州市世界遺産登録推進室)